

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「家庭学習」「生活習慣等」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 小学5年から中学3年までの5学年を通じた比較
- ③ 同一学年での定点比較(昨年度の小学6年と今年度の小学6年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、中学3年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	8,090人	8,410人	96.2%
小学6年	8,121人	8,506人	95.5%
中学1年	7,990人	8,197人	97.5%
中学2年	7,891人	8,213人	96.1%
中学3年	7,751人	8,144人	95.2%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、3年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

- (ア) 学校生活
- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 家庭学習
- (カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

質問項目		小学校 [全45問]	中学校 [全48問]
(ア) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・ 20(ア・イ・ウ・エ)・35・ 36	5・18(ア・イ・ウ・エ・ オ)・20(ア・イ・ウ・エ・ オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2・3のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17	15・16・17
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2・3のみ
(カ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(ク) 生活習慣等		21・37・38・39・40・41・ 42・43・44・45	21・40・41・42・43・44・ 45・46・47・48

イ 質問の意図

(ア) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(カ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

(ク) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第Ⅰ章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られる全体的な傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第5学年、小学校第6学年、中学校第1学年、中学校2学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

回答者数

小学校 1234人

中学校 967人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第Ⅰ章の注を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～6	設問2～6
(イ) 学習環境の活用	設問7～10	設問7～10
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問11～19	設問11～19
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問20～29	設問20～31
(オ) 教師の指導観	設問30～33	設問32～35
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問34～36	設問36～38

イ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数

(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

最終更新日: 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

児童生徒意識調査の分析に当たっては、第 I 章の調査内容の中で述べたように「学校生活」「学習動機」「学習活動(教科全般)」「家庭学習」「生活習慣等」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られるおおまかな傾向
- ② 小学5年から中学3年までの5学年を通じた比較
- ③ 同一学年での定点比較(昨年度の小学6年と今年度の小学6年というような比較)
- ④ 回答状況と正答率との関連

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、「回答状況と正答率との関連」を見る関係上、各学年において全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、中学3年は5教科)のペーパーテストを受検した児童生徒のデータを、有効回答としている。各学年の有効回答者数と有効回答者率は、下記のとおりである。

	有効回答者数	全回答者数	有効回答者率
小学5年	8,090人	8,410人	96.2%
小学6年	8,121人	8,506人	95.5%
中学1年	7,990人	8,197人	97.5%
中学2年	7,891人	8,213人	96.1%
中学3年	7,751人	8,144人	95.2%

- (2) 本章で記述する「正答率」については、有効回答者の全教科(小学5年、小学6年は4教科、中学1年は4教科、中学2年、3年は5教科)の平均正答率を用いた。
- (3) 「回答状況と正答率との関連」について記述については、それぞれの回答選択肢を選択した児童生徒全員の正答率の平均を求めて比較した。選択肢の回答状況によりそれぞれの回答選択肢を選択した児童生徒数は異なるため、児童生徒数が極めて少ない回答選択肢については、その正答率を比較することが適切でない場合も考えられる。このような場合については、その旨を文中に記した。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

- (ア) 学校生活
- (イ) 学習動機
- (ウ) 学習活動(教科全般)
- (エ) 学習活動(各教科)
- (オ) 家庭学習
- (カ) 生活習慣等

質問項目とそれぞれの設問との関係は以下の表のとおりである。

質問項目		小学校 [全45問]	中学校 [全48問]
(ア) 学校生活		1・2・3・4	1・2・3・4
(イ) 学習動機		5・18(ア・イ・ウ・エ)・ 20(ア・イ・ウ・エ)・35・ 36	5・18(ア・イ・ウ・エ・ オ)・20(ア・イ・ウ・エ・ オ)・38・39 ※18(オ)・20(オ)は中2・3のみ
(ウ) 学習活動 (教科全般)		15・16・17	15・16・17
(エ) 学習活動 (各教科)	国語	19ア・22・23・24・25	19ア・22・23・24・25
	社会	19イ・26・27・28	19イ・26・27・28
	算数 数学	19ウ・29・30・31	19ウ・29・30・31
	理科	19エ・32・33・34	19エ・32・33・34
	英語		19オ・35・36・37 ※中2・3のみ
(カ) 家庭学習		6・7・8・9・10・11・ 12・13・14	6・7・8・9・10・11・ 12・13・14
(ク) 生活習慣等		21・37・38・39・40・41・ 42・43・44・45	21・40・41・42・43・44・ 45・46・47・48

イ 質問の意図

(ア) 学校生活

学校生活の楽しさ、好きな授業の有無などについて問うことにより、児童生徒の学校生活の実態を把握する。

(イ) 学習動機

勉強に対する興味や有用性、将来の夢や目標の有無について問うことにより、学習動機の高さについての実態を把握する。

(ウ) 学習活動(教科全般)

自分の考えを発表する機会や児童生徒の間で話し合う活動の頻度、自分の考えの表現に対する抵抗感について問うことにより、児童生徒の学習活動全般の実態について把握する。

(エ) 学習活動(各教科)

各教科の内容の理解度についての自己評価、各教科の特性に応じた学習内容や学習方法についての児童生徒の興味・関心・意欲・態度について問うことにより、それぞれの教科についての学習活動の実態について把握する。

(カ) 家庭学習

授業以外の勉強時間や勉強の内容、塾や家庭教師の有無など児童生徒の学習方法全般について問うことにより、児童生徒の家庭学習の実態について把握する。

(ク) 生活習慣等

読書時間、テレビやゲームなどの時間、就寝時刻、朝食や家の手伝いの頻度、地域における行事などへの参加の頻度などについて問うことにより、児童生徒の家庭における生活習慣の実態について把握する。

教師意識調査結果の分析に当たって

1 分析の方針

教師意識調査の分析に当たっては、第Ⅰ章の調査内容の中で述べたように「教科全般における指導法の工夫」「学習環境の活用」「家庭学習への関与状況」「教師の指導観」「学校組織マネジメントに対する意識」というカテゴリーに分けて、分析を行った。

それぞれの設問については、

- ① 今回の調査に見られる全体的な傾向
- ② 学校スコアによるグループ比較

という観点から調査結果の分析を行った。

2 分析に当たって留意した点

- (1) 分析の対象となるデータについては、昨年度、小学校第4学年、小学校第5学年、小学校第6学年、中学校第1学年、中学校2学年を担当した教師の3月調査での回答を用いている。回答者数は、下記のとおりである。

回答者数

小学校 1234人

中学校 967人

- (2) 教師意識調査の回答選択肢を指導の頻度や内容に応じて点数化し、各学校の有効回答者の平均を求めたものを学校スコアとしている。詳細は第Ⅰ章の注を参照していただきたい。
- (3) 指導状況の違いを明らかにするために、各設問ごとに小、中学校の学校スコア上位四分の一の学校群をAグループ、下位四分の一の学校群をBグループとして、グループにおける平均正答率の状況を比較した。基本的にAグループがその指導が多く行われている(又は、意識が高い)学校群、Bグループがその指導があまり行われていない(又は、意識があまり高くない)学校群となっている。

3 意識調査質問項目の構成

ア 質問項目の構成

カテゴリ	小学校	中学校
(ア) 家庭学習への関与状況	設問2～6	設問2～6
(イ) 学習環境の活用	設問7～10	設問7～10
(ウ) 教科等全般における指導法の工夫	設問11～19	設問11～19
(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫	設問20～29	設問20～31
(オ) 教師の指導観	設問30～33	設問32～35
(カ) 学校組織マネジメントに対する意識	設問34～36	設問36～38

イ 質問の意図

(ア) 家庭学習への関与状況

宿題を出している頻度ならびに出している宿題の質(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を把握する。

(イ) 学習環境の活用

授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度とその活用内容を把握する。

(ウ) 教科等全般における指導法の工夫

発展的な課題を取り入れた授業の実施状況、理解が十分でない児童生徒に対する授業外での対応状況、書いて表現する活動や話し合い活動を取り入れた授業の実施(教科の授業・総合的な学習の時間)、身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導、学習方法についての指導状況、学習形態の工夫、目標や評価規準を明確にした授業の実施について問うことにより、発展的学習・補充的指導・表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習方法の指導、学習形態の工夫、目標を明確にした指導などの状況を把握する。

(エ) 教科の特性に応じた指導法の工夫

国語における言語活動、読書指導、社会における調査学習を生かした発表・討論、算数・数学における算数

(数学)的活動、問題解決的な学習、理科における見通しをもった観察や実験とそのまとめ、英語におけるコミュニケーション能力を高める指導や書く活動などについて問うことにより、各教科の特性に応じた指導法の工夫の状況を把握する。

(オ) 教師の指導観

教師の指導行動を主に、課題達成の意識、集団維持の意識の2点から問うことにより、教師の指導観と正答率に及ぼす影響を分析する。

(カ) 学校組織マネジメントに対する意識

教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解、職員間の雰囲気について問うことにより、学校組織マネジメントが児童生徒の正答率や児童生徒の学習に対する意識に及ぼす影響を把握する。

最終更新日: 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

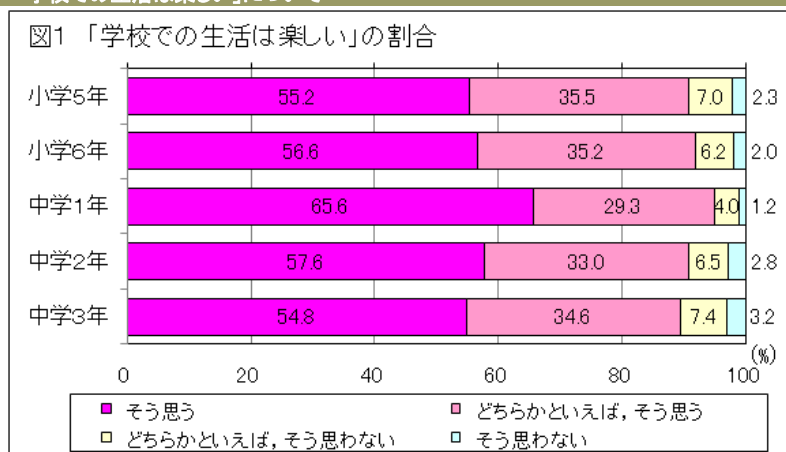
児童生徒意識調査の全てのグラフ

1 学校生活

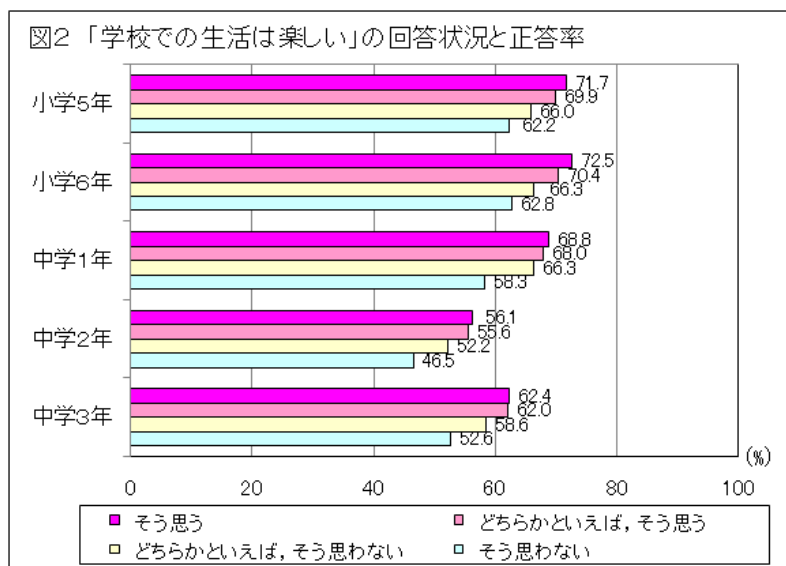
- 「学校での生活は楽しい」及び「学校で落ち着いて勉強することができる」と感じている児童生徒の割合は、小学校、中学校ともに全体の約9割である。[図1]
- 全ての学年において、「学校は楽しい」、「落ち着いて勉強することができる」、「好きな授業がある」と回答している児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図2][図4][図6]
- 学年が上がるごとに、「好きな授業がある」と回答した児童生徒の割合が低くなることについては、その要因を探り、改善を図っていくことが大切である。[図5]

ここでは、児童生徒の学校生活についての調査結果を述べる。具体的には、学校生活の楽しさや学習状況の設問について分析した。

ア 「学校での生活は楽しい」について

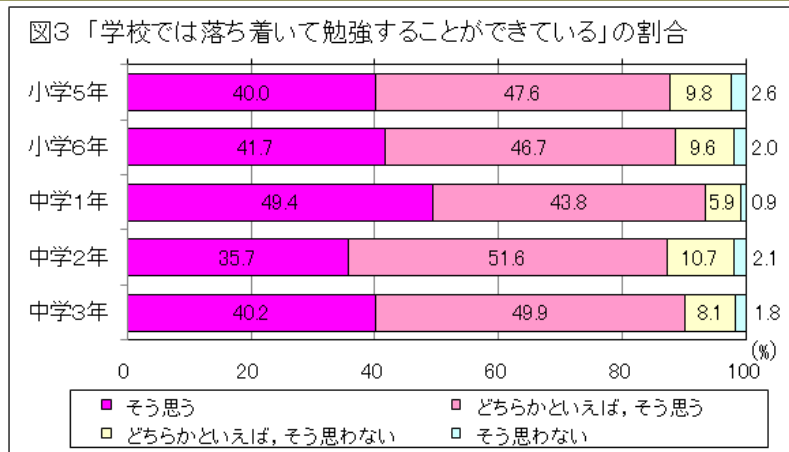


「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年55.2%、小学6年56.6%、中学1年65.6%、中学2年57.6%、中学3年54.8%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学生、中学生ともに、どの学年も約9割となっている。特に、中学1年では94.9%と最も高い割合である。[図1]

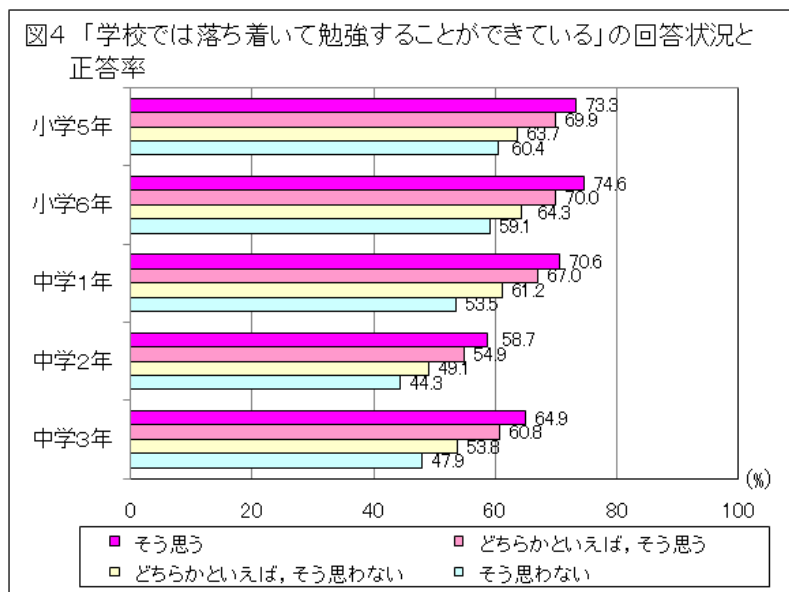


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。学校生活に対して楽しさを感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図2]

イ 「学校では落ち着いて勉強することができる」について

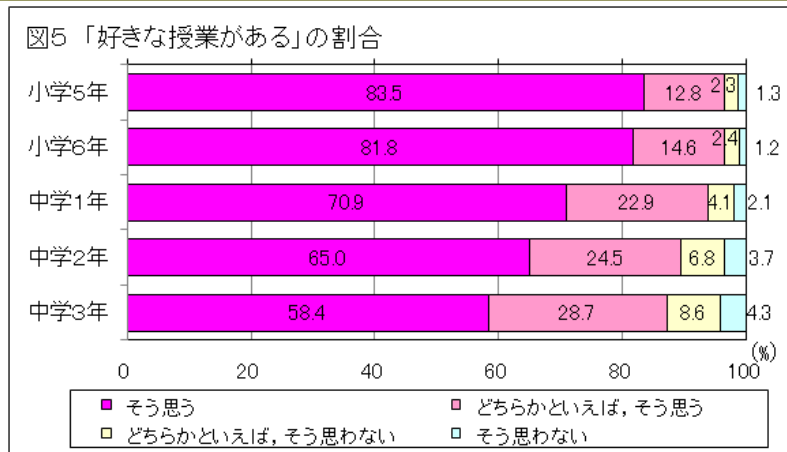


「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年40.0%、小学6年41.7%、中学1年49.4%、中学2年35.7%、中学3年40.2%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学生、中学生ともにどの学年も、約9割となっている。特に、中学1年では93.2%と最も高い割合である。[図3]

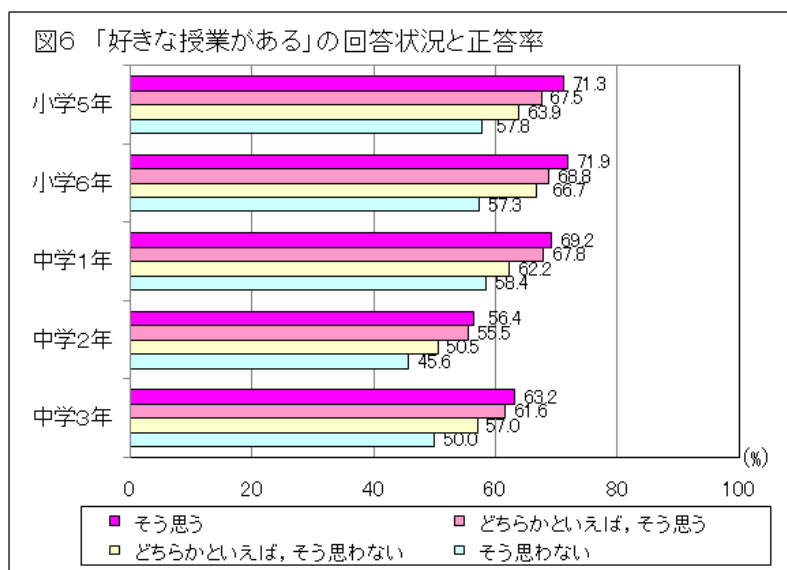


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。落ち着いて勉強することができると感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図4]

ウ 「好きな授業がある」について



「そう思う」と回答した児童生徒の割合は、小学5年83.5%、小学6年81.8%、中学1年70.9%、中学2年65.0%、中学3年58.4%となっている。「どちらかといえばそう思う」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では9割、中学校では8割を上回っているが、学年が上がるにしたがって、その割合が低くなっている。【図5】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「そう思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。好きな授業があると感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られる。【図6】

○ これからの指導に向けて

この3つの調査から、「学校生活の楽しさ」や「落ち着いた学習への取り組み」、「好きな授業があること」と、学力の定着については関係があると考えられる。「学校生活の楽しさ」や「落ち着いた学習への取り組み」において、中学1年で「そう思う」の割合が最も高い数値を示していることについては、入学して間もない生徒の中学校生活への期待感の表れではないかと考えることができる。また、学年が上がるにしたがって、「好きな授業がある」と回答した児童生徒の割合が低くなっていることについては、児童生徒の発達段階や学習内容の違いなど様々な要因が考えられる。しかし、各学年や各教科ごとに課題として受け止め、その要因を探りながら、改善を図っていくことが大切である。小学校と中学校の接続についても、学校区単位での児童生徒に関わる情報交換や授業交流などの小中連携の取り組みを、なお一層進めていくことが重要である。また、落ち着いて学習に取り組むことができる環境を整えることや、そのための指導体制づくりに学校全体で取り組むことが、学力向上に向けての足掛かりとなると考える。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

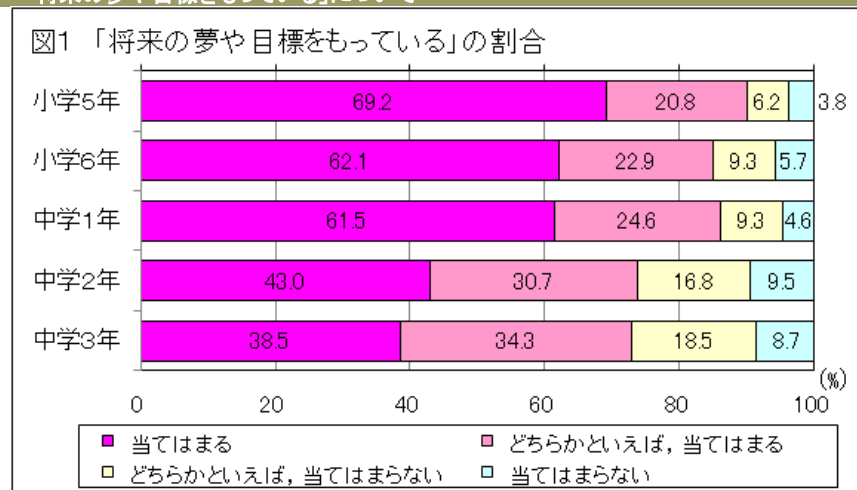
児童生徒意識調査の全てのグラフ

2 学習動機

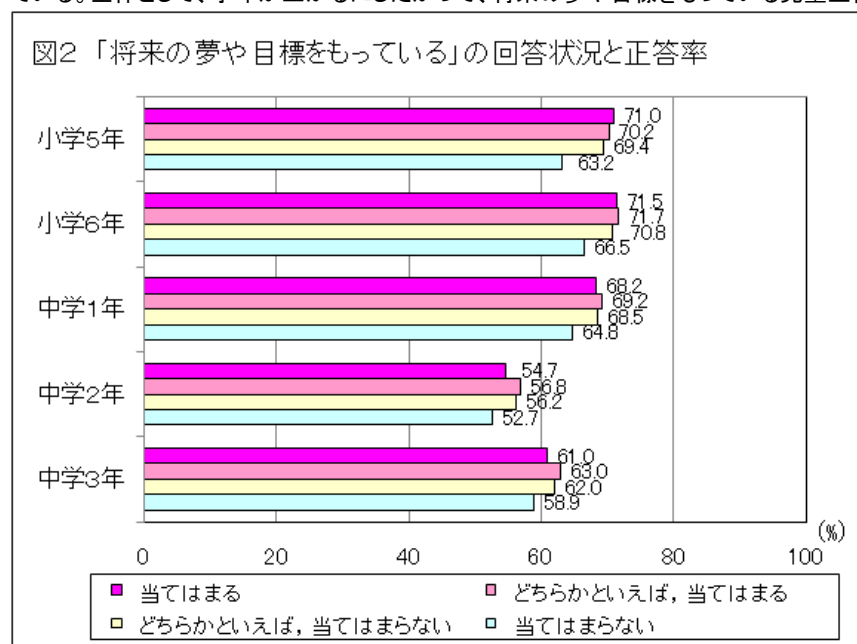
- 「将来の夢や目標をもっている」と回答した児童生徒は、小学校で8割、中学校で7割を超えている。しかし、学年が上がるとその割合が減少していることについては、課題と捉え、その要因を探り、改善に向けて取り組んでいく必要がある。[図1]。

ここでは、「将来の夢や目標をもっているか」という設問を通して、児童生徒の将来に対する意識と全教科平均正答率との関連についての調査結果を述べる。

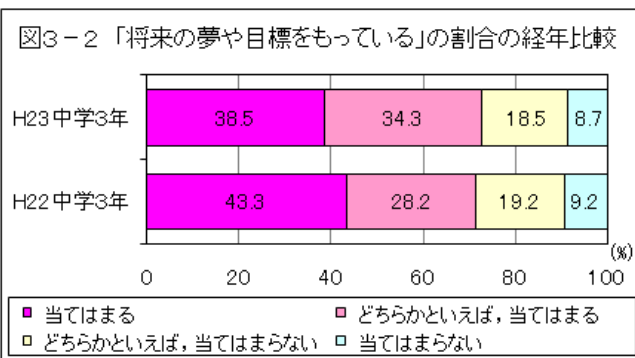
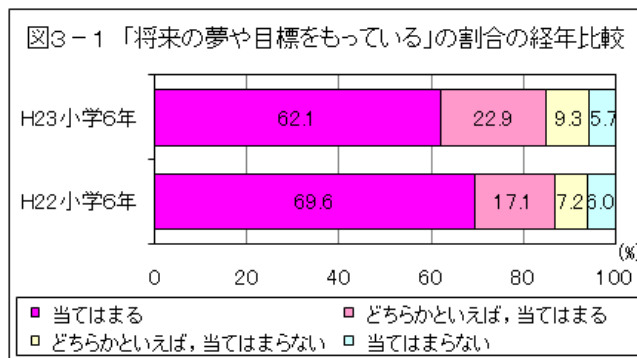
ア 「将来の夢や目標をもっている」について



「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年69.2%、小学6年62.1%、中学1年61.5%、中学2年43.0%、中学3年38.5%となっている。「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、小学校では8割を、中学校では7割を上回っている。全体として、学年が上がるにしたがって、将来の夢や目標をもっている児童生徒の割合が低くなっている。[図1]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校、中学校において、「当てはまらない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低くなっている。[図2]



小学6年と中学3年における「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、平成22年度と比べると、わずかながら減少が見られるが、「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせて比べると、大きな変化は見られない。[図3-1][図3-2]

○ これからの指導に向けて

「将来の夢をもつ」ということは、自分の将来への見通しをもつことにつながり、児童生徒の学習意欲の向上にも効果が期待できると考えられる。このことから、将来の夢を児童生徒にもたせることは大切である。

従来の特別活動における進路指導に加え、キャリア教育の視点に立った継続的・系統的な指導が必要である。憧れの職業や人物像、目標を達成するための手段など、児童生徒が将来についてより具体的に考えられるようにするとともに、将来について希望がもてるように支援していくことが大切である。また、将来の夢や目標をもつことができても、そのことが、学校で学習していることと直接結び付けづらいために、学習意欲や学力の向上につながらないことも考えられる。児童生徒にとって、学習することが自分の将来に役に立ったり、自分の将来の可能性を広げたりするものであることが実感できるように、支援していくことが大切である。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の全てのグラフ

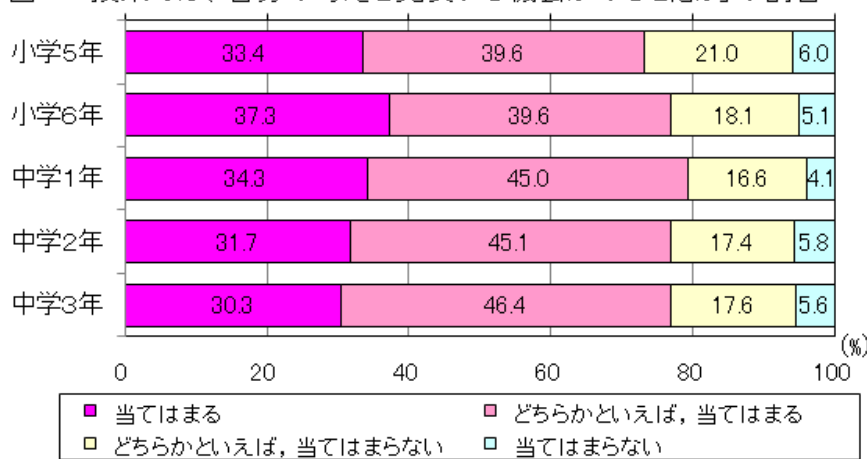
3 学習活動(教科全般)

- 授業で自分の考えを発表する機会が与えられていたり、話し合う活動をよく行っていたりする児童生徒ほど、全教科平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図1][図2][図3][図4]
- 「自分の考えを表現することを難しいと思う」児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて、大きくなっている。各授業において自分の考えや意見を表現する場の設定を積極的に行うことや、誰もが意見を言えるような雰囲気づくりをしていくことが大切であるとする。[図5]

ここでは、授業中における「発表の機会があるか」「話し合う活動を行っているか」「他の人に説明したり、文章に書いたりすることは難しいか」という設問を通して、児童生徒の授業中における言語活動に関する意識の状況と、教科平均正答率との関連について調査結果を述べる。

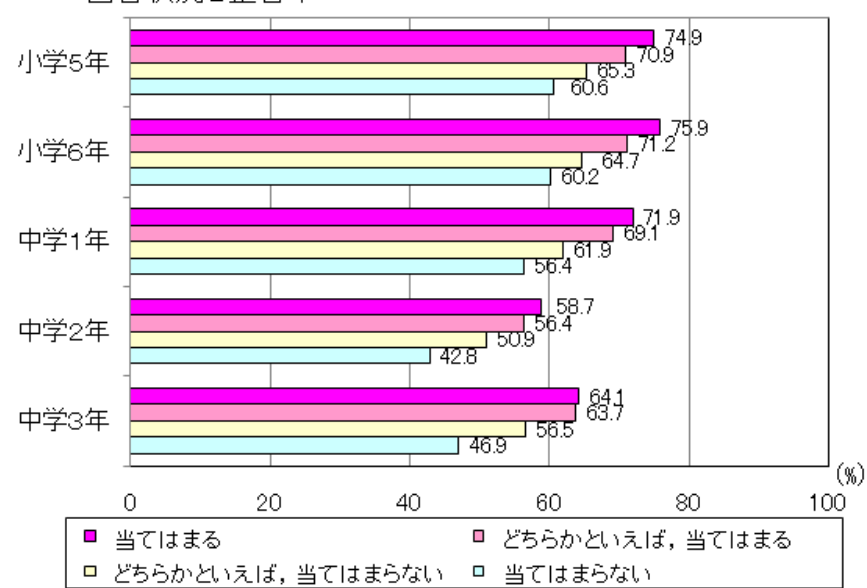
ア 「普段の授業では、自分の考えを発表する機会があたえられていると思う」について

図1 「授業では、自分の考えを発表する機会があると思う」の割合



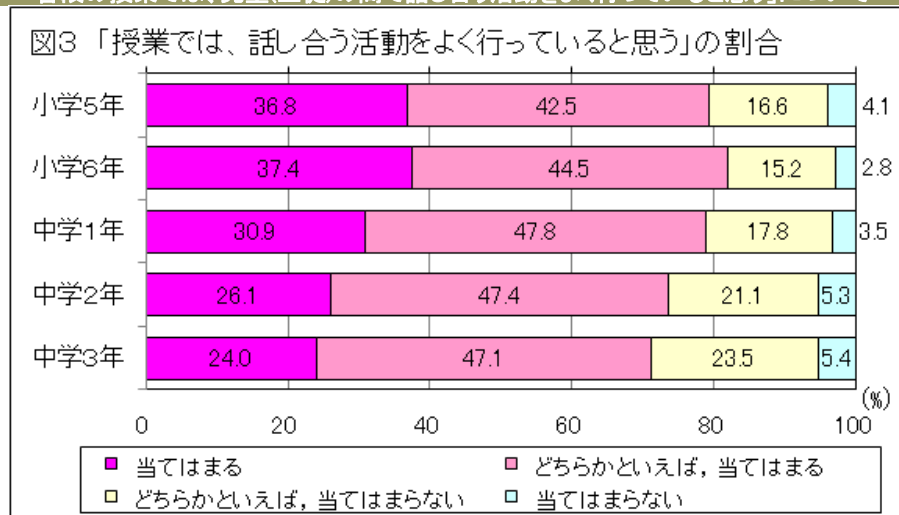
「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年33.4%、小学6年37.3%、中学1年34.3%、中学2年31.7%、中学3年30.3%になっている。「どちらかという当てはまる」と回答した児童生徒を合わせると、どの学年も7割を上回っている。特に、中学1年では、79.3%と最も高い割合を示している。[図1]

図2 「授業では、自分の考えを発表する機会があると思う」の回答状況と正答率

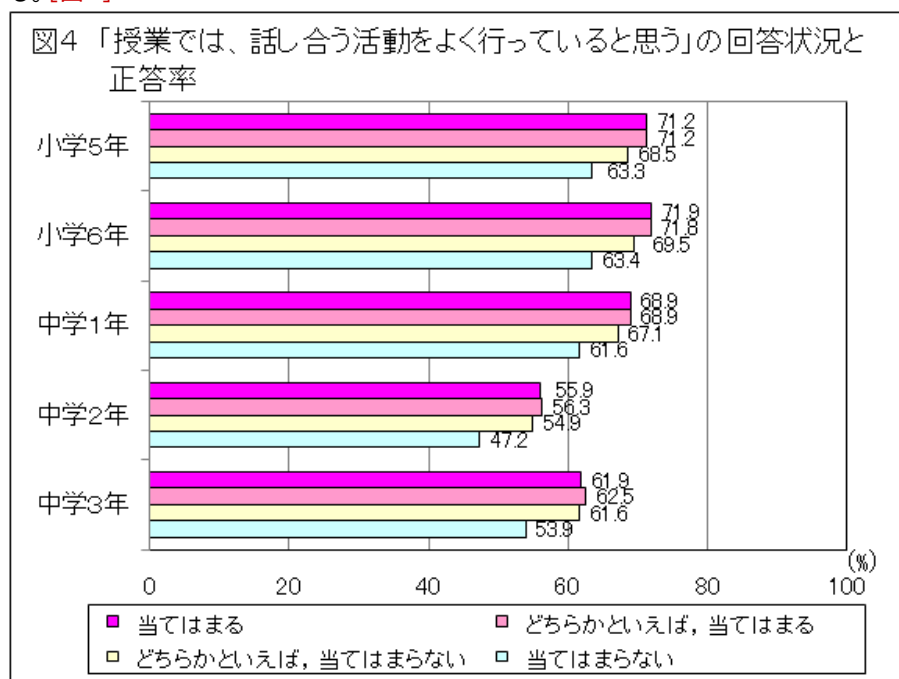


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっており、授業中に発表する機会があたえられていると思っている児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図2]

イ 「普段の授業では、児童(生徒)の間で話し合う活動をよく行っていると思う」について

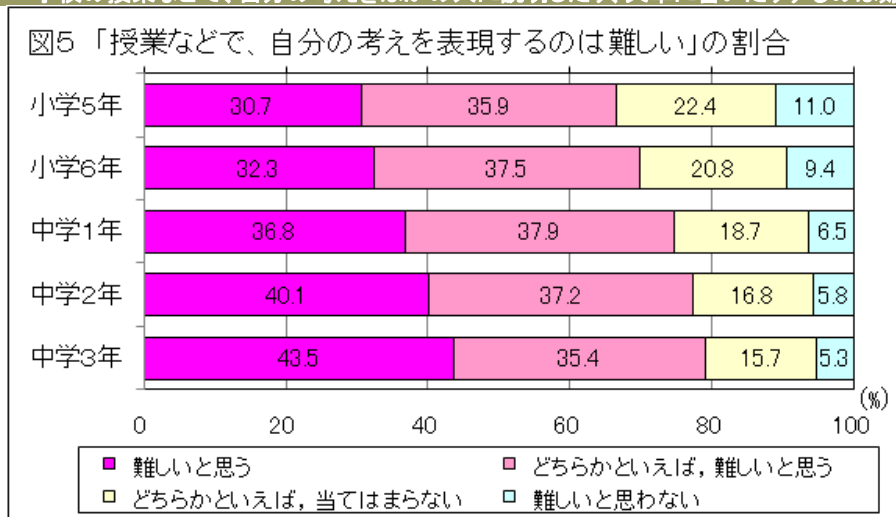


「当てはまる」と回答した児童生徒の割合が小学5年36.8%、小学6年37.4%、中学1年30.9%、中学2年26.1%、中学3年24.0%となっている。「どちらかという当てはまる」と回答した児童生徒を合わせると、どの学年も7割を上回っており、特に、小学6年では、81.9%と最も高い割合を示している。中学校では学年が上がるにしたがって、その割合が低くなっている。[図3]

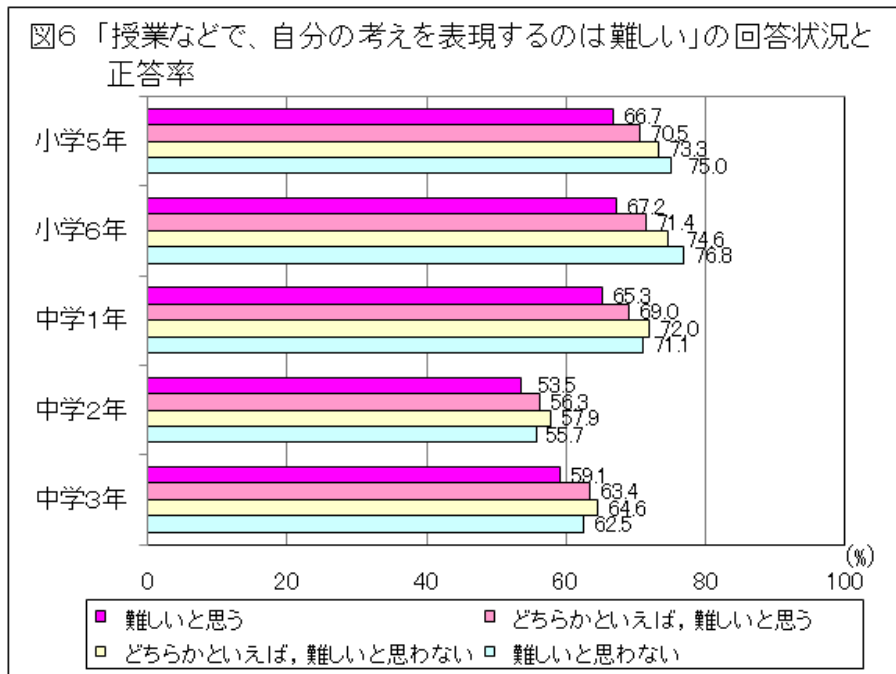


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全体的に全ての学年において、授業でよく話し合う活動を行っていると思っている児童生徒ほど平均正答率が高くなる傾向が見られる。特に、全ての学年に共通して、授業でよく話し合う活動を行っていると思うことに対し、「当てはまらない」と回答している児童生徒の平均正答率は、他の回答をした児童生徒に比べると低くなっている。[図4]

ウ 「学校の授業などで、自分の考えをほかの人に説明したり、文章に書いたりするのは難しい」について



「難しいと思う」と回答した児童生徒の割合が小学5年30.7%、小学6年32.3%、中学1年36.8%、中学2年40.1%、中学3年43.5%となっている。学年が上がるにしたがって、その割合も増えていく傾向にあり、中学3年においては「どちらかといえば難しい」と回答した生徒を合わせると78.9%と最も高い割合を示している。[図5]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「難しいと思う」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低く、全体的に自分の考えを表現することを難しいと感じている生徒ほど、平均正答率が低くなる傾向が見られる。[図6]

○ これからの指導に向けて

授業において、児童生徒に発表する機会を設けたり、話し合う活動を取り入れたりすることで、自分の考えや意見を明確にさせることが期待できる。また、自分の考えや意見を話し合う活動によって交流させることは、児童生徒のものの見方や考え方を深めさせたり広げさせたりすることが期待できる。それだけでなく、児童生徒の言語能力や表現力を培う上で、大切なことでもある。授業の中で、教師が機会を捉え、意図的に生徒の意欲を引き出せるような課題を設定したり、獲得した知識・技能が生かせるような表現活動を仕組んだりしていくことが大切である。しかしながら、授業時間数も限られているため、全ての時間にそれらの活動を設定していくことは難しい。そのため、年間指導計画や単元計画を見直していくことも必要である。また、学年が上がるごとに自分の考えを表現することが難しいと思う児童生徒が増えている傾向が見られた。

[図5] その要因としては、学習の内容が難しくなること、小学校から中学校へと学習環境も大きく変わること、思春期の特徴ともいえる周囲を気にして、自分の意見を自信をもって伝えることができなくなることなどが考えられる。そこで、誰もが意見を伝えることができ、間違っても認めてあげられるような支持的な風土づくりやルールづくりをしていくことが、最も重要なことであると考えられる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

児童生徒意識調査の結果の分析

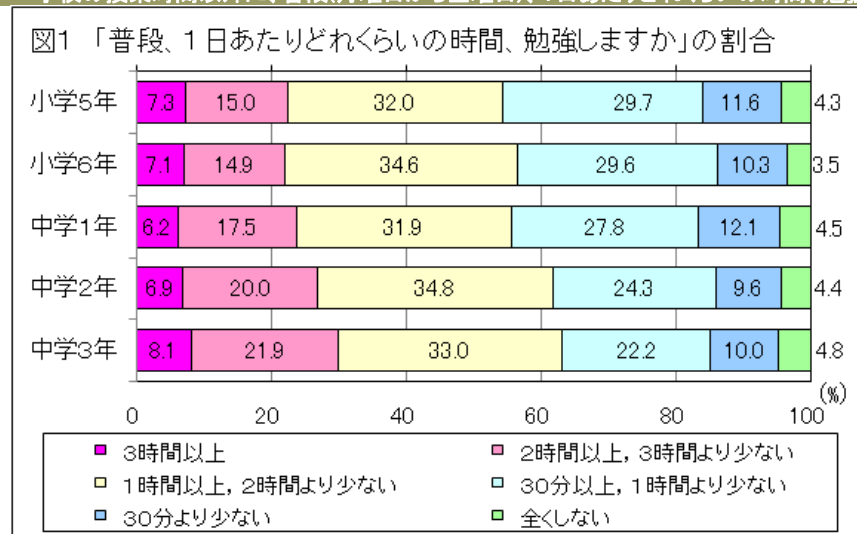
児童生徒意識調査の全てのグラフ

4 家庭学習

- 普段の日(月曜日から金曜日)の1日の学習時間は、学年が上がるごとに増える傾向であるが、「学習時間が1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合は、全体的に約4割を占めている。家庭学習の時間が十分でない児童生徒に対し、その改善を図るための取り組みが必要である。[図1]
- 自分で計画を立てて勉強している児童生徒の割合は、小学校に比べて中学校が低くなっている。[図3]
- 学校の授業の復習をしたり、苦手な教科の勉強をしたりしている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図6][図9]

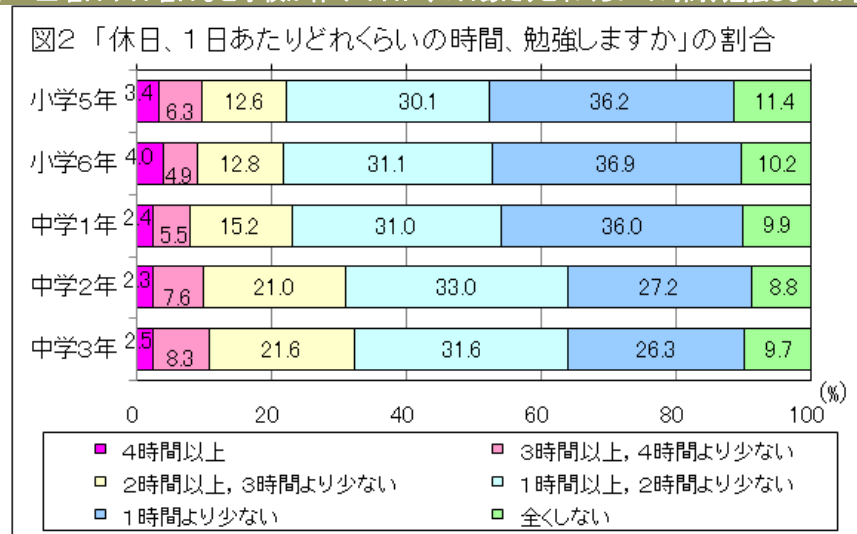
この節では、児童生徒の家庭学習についての調査結果を述べる。具体的には、家庭学習の時間と学習の内容や仕方及び全教科平均正答率との関連について述べる。

ア 「学校の授業時間以外に、普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」について



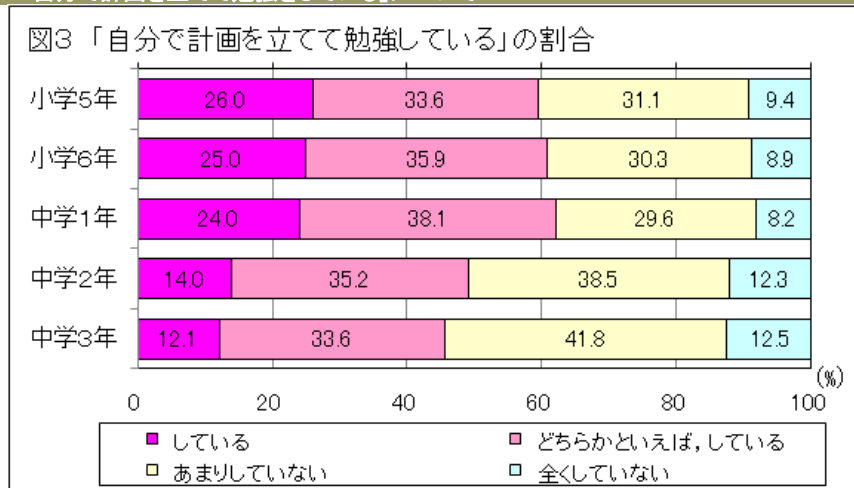
学年が上がるごとに、学習時間は少しずつ増える傾向が見られる。しかし、勉強の時間が1時間より少ないと回答した児童生徒の割合を各学年ごとに見ると、小学5年45.6%、小学6年43.4%、中学1年44.4%、中学2年38.3%、中学3年37.0%であり、全体として家庭での学習が十分であるとは言えない状況である。また、「全く勉強をしない」または「30分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、各学年において大きな変化は見られず、約15%という結果になっている。[図1]

イ 「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか」について

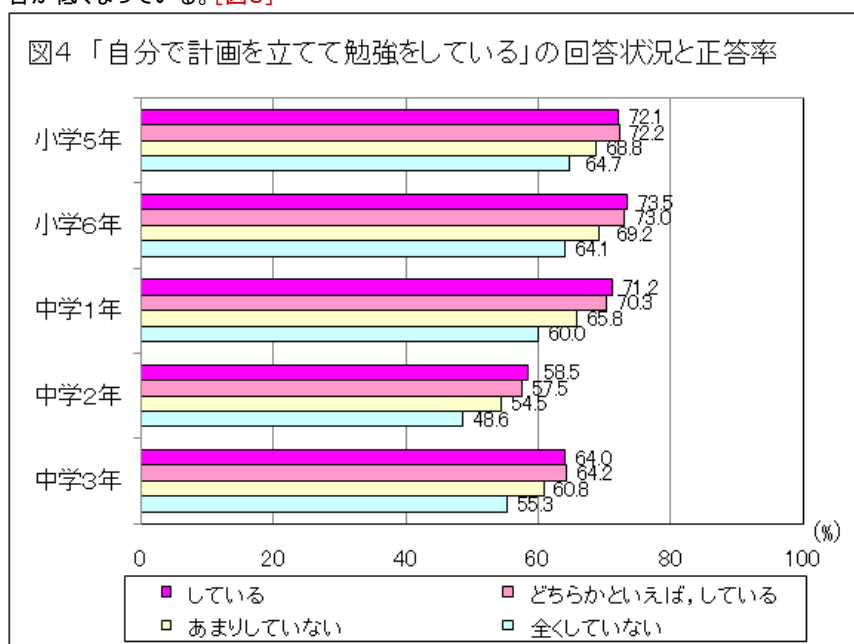


普段の日と同様に、学年が上がるにしたがって、学習時間は少しずつ増える傾向が見られる。また、全ての学年に共通して、「全く勉強をしない」と回答した児童生徒の割合は、約10%という結果になっている。[図2]

ウ 「自分で計画を立てて勉強をしている」について

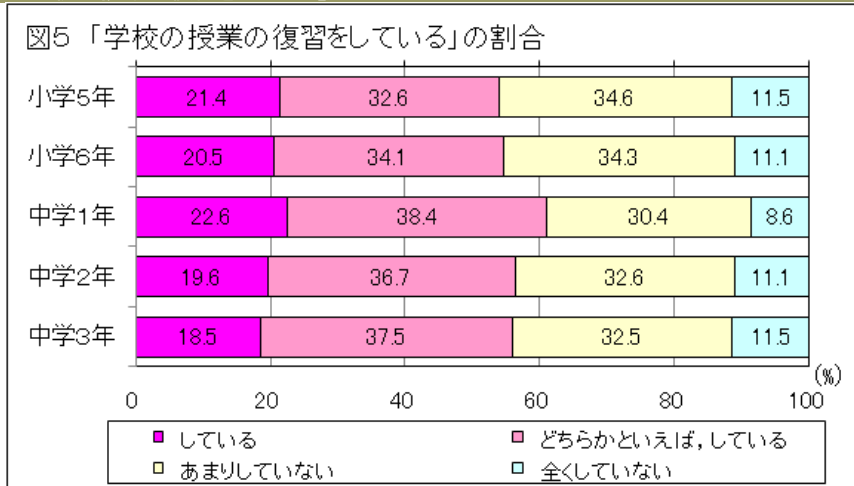


「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年59.6%、小学6年60.9%、中学1年62.1%、中学2年49.2%、中学3年45.7%である。中学2年と中学3年については、他の学年に比べて、自分で計画を立てて勉強している生徒の割合が低くなっている。[図3]

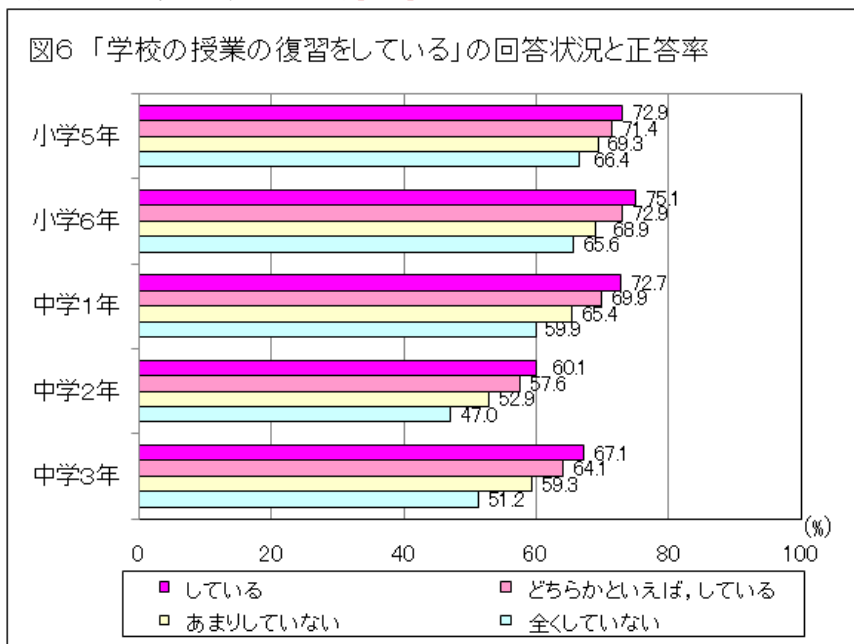


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全体的に自分で計画を立てて勉強している児童生徒ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図4]

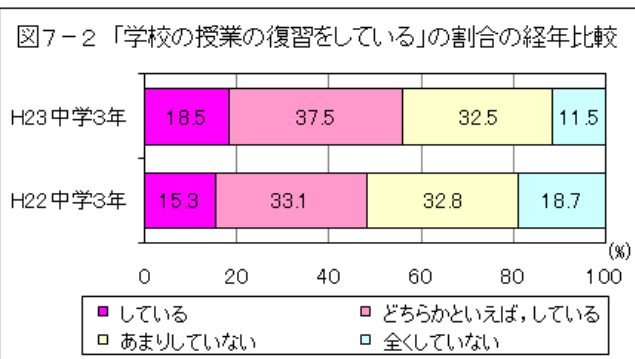
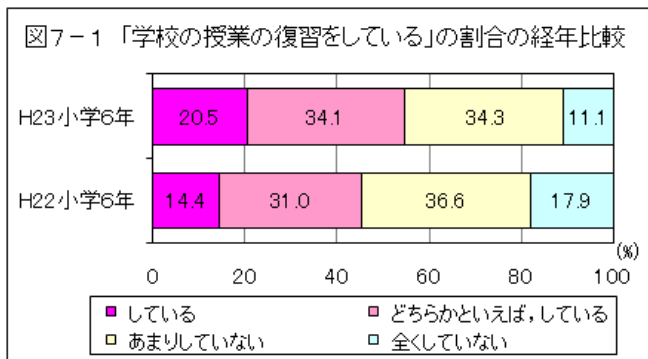
エ 「学校の授業の復習をしている」について



「している」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、中学1年がわずかに高くなっているが、全体的に各学年を比較して大きな変化は見られない。[図5]

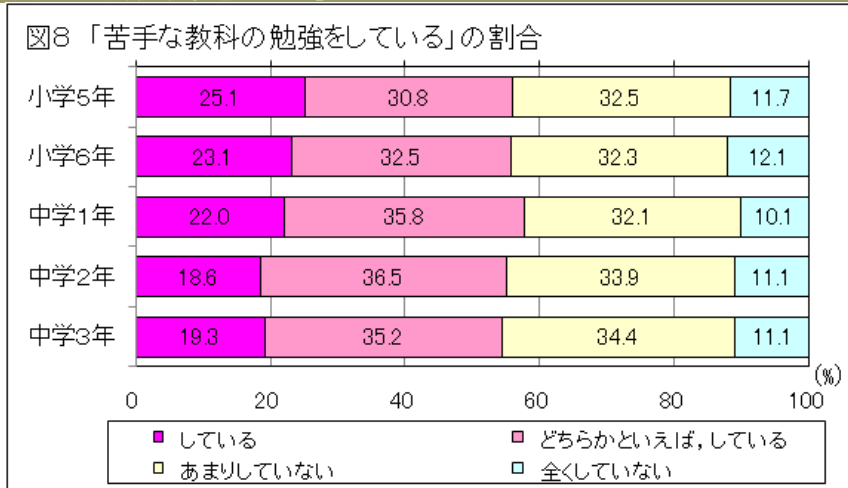


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、学校の授業の復習をしている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図6]

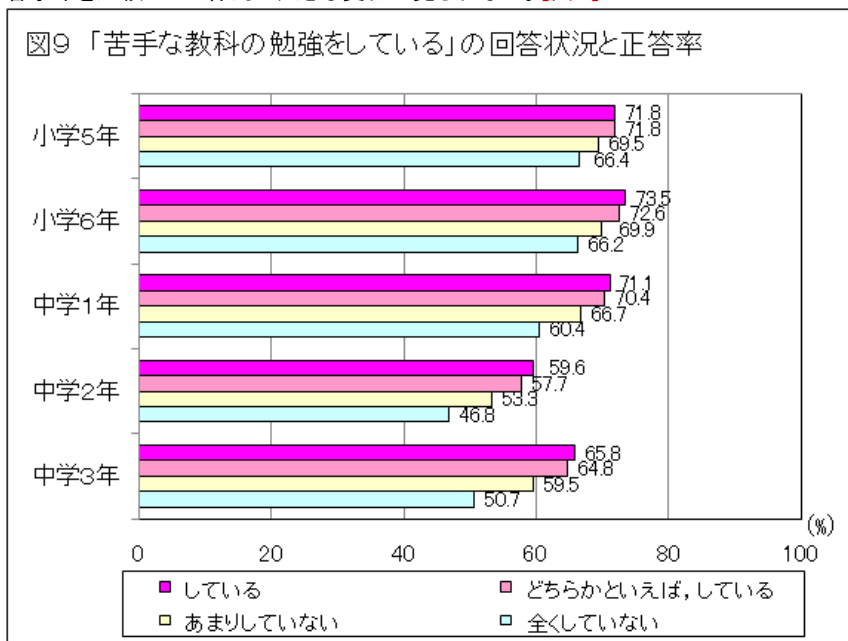


小学6年と中学3年における「学校の授業の復習をしている」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、平成22年度と比べると、ともに高くなっている。[図7-1][図7-2]

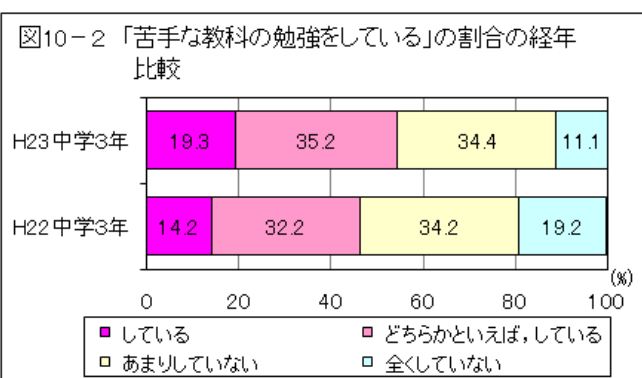
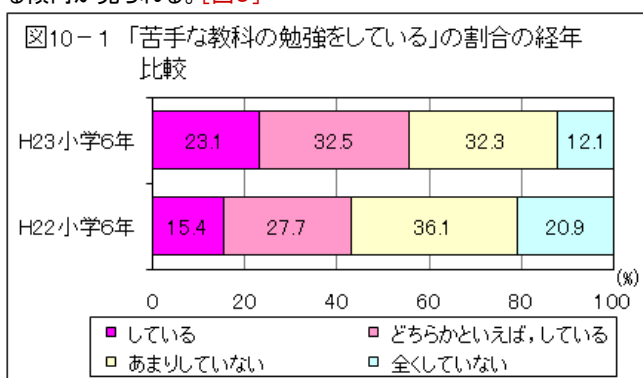
オ 「苦手な教科の勉強をしている」について



各学年を比較して全体的に大きな変化は見られない。【図8】



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、苦手な勉強をしている児童生徒ほど、平均正答率が高くなる傾向が見られる。【図9】



小学6年と中学3年における「苦手な教科の勉強をしている」「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合は、平成22年度と比べると、ともに高くなっている。【図10-1】【図10-2】

○ これからの指導に向けて

児童生徒の普段の日(月曜日から金曜日)の勉強時間については、1時間よりも少ないと回答している児童生徒の割合が、小学5年から中学1年までで4割を越え、中学2年と中学3年とで4割に迫る結果となっている。この事実は、小学校・中学校ともに課題として捉えるべきである。児童生徒への家庭学習に対する意識のもたせ方、宿題の出し方、保護者との連携協力の在り方など、家庭学習に関して日頃取り組まれている活動を見直し、改善を図っていく必要がある。また、中学2年生と中学3年生において、自分で計画を立てて勉強している生徒の割合が低下しているが、これも課題と捉え改善を図る必要があると思われる。中学校では部活動もあるため、小学校に比べると、全体的に家庭で過ごす時間は少ないことが考えられる。そのため、日々の家庭学習について、生徒が自分で計画を立てて勉強できるようにすることは、家庭での時間を有効に使う上でも、大切なことであると考えられる。

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 児童生徒意識調査の結果の分析

IV 児童生徒意識調査の結果の分析

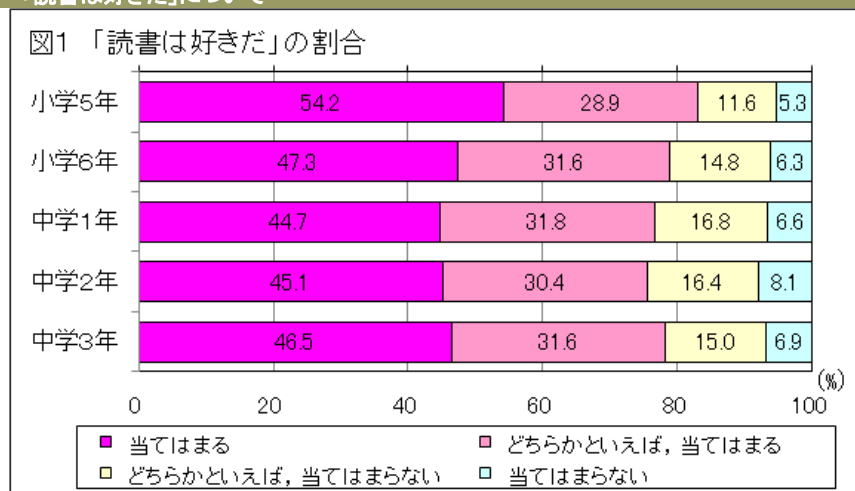
児童生徒意識調査の全てのグラフ

5 生活習慣等

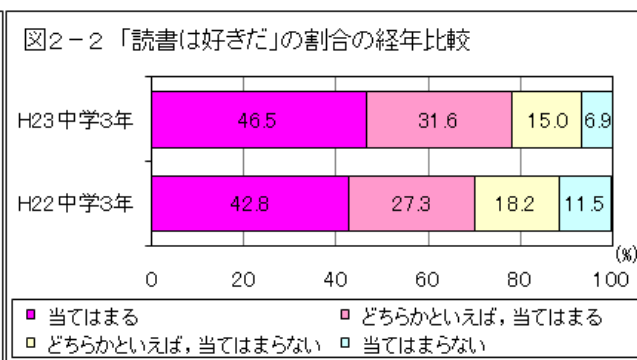
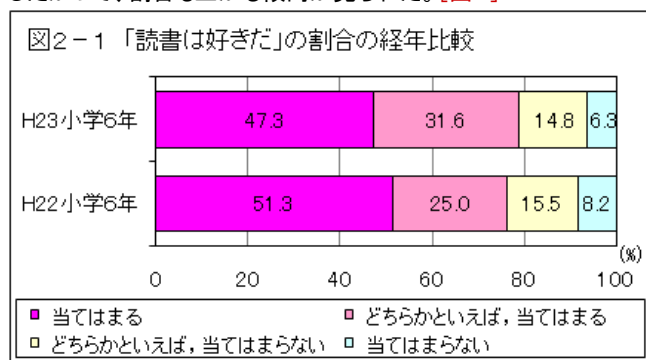
- 読書が好きな児童生徒は、どの学年も75%を上回っている。[図1]しかし、読書の時間について、「まったくしない」、「10分より少ない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにつれて増加している。[図4]
- 朝食を毎日食べていると回答した児童生徒の割合は、各学年とも8割を上回っている。[図7]また、朝食をきちんと食べている児童生徒ほど平均正答率が高くなっている。[図8]
- テレビを視聴したりテレビゲームをしたりする時間が長くなるほど、平均正答率も低下していく傾向が見られる。[図13、図16]
- 家庭学習や読書の時間を含めた家庭で過ごす時間の使い方について、児童生徒に考えさせ、改善を図る取組が必要である。

この節では、読書時間、テレビやゲームなど自由に過ごす時間、就寝時刻、朝食など、生活習慣全般についての設問から、児童生徒の生活習慣についての調査結果を述べる。

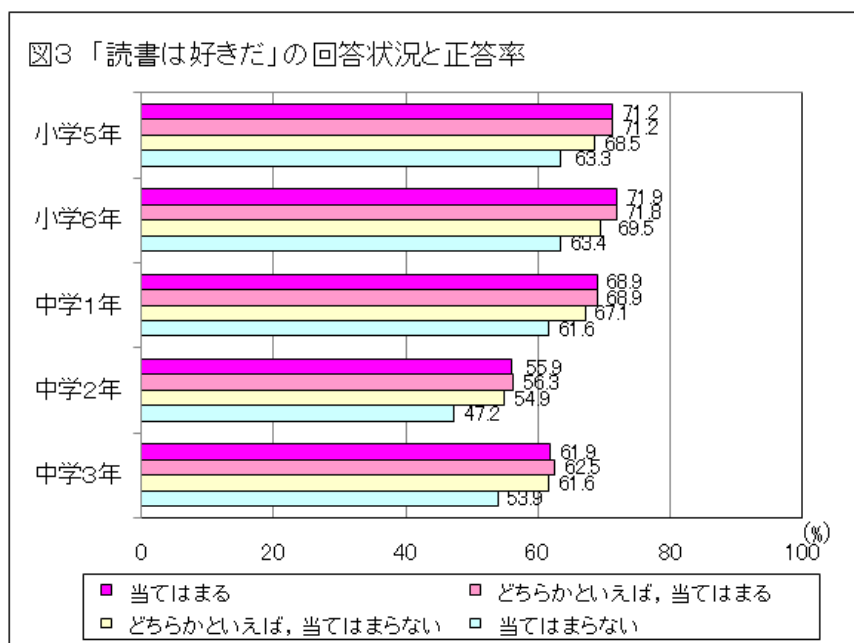
ア 「読書は好きだ」について



「当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、小学5年生54.2%、小学6年生47.3%、中学1年44.7%、中学2年45.1%、中学3年46.5%となっている。「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合を合わせると、全ての学年が7割を上回っている。特に、小学5年生では、83.1%と最も高い割合であった。しかし、「当てはまらない」と回答している児童生徒を見てみると、学年が上がるにしたがって、割合も上がる傾向が見られた。[図1]

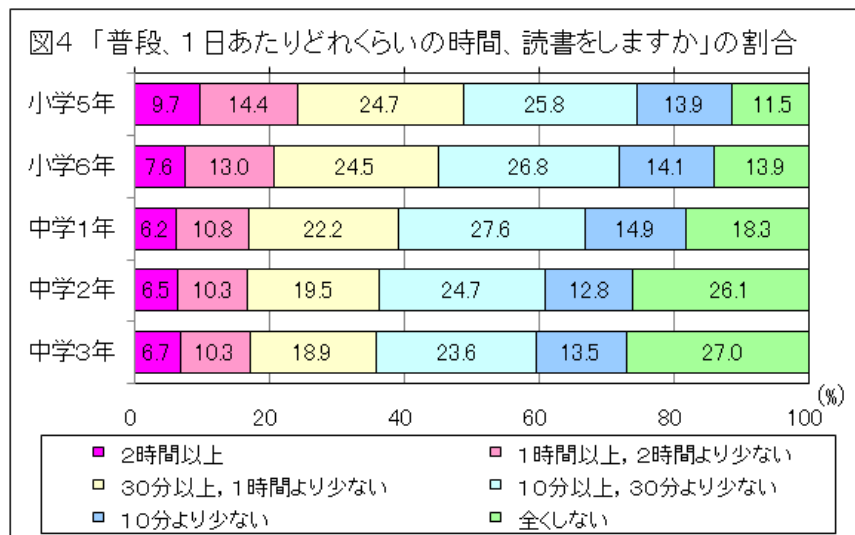


この設問について、小学6年と中学3年を平成22年度と比べると、小学6年において、「当てはまる」の割合が下がったものの、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と回答した児童生徒の割合は、どちらの学年においても、上回った。特に、中学3年生では、8.0ポイント上回った。[図2-1、図2-2]

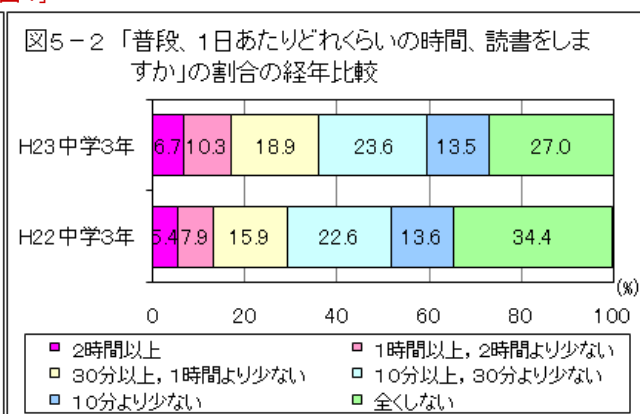
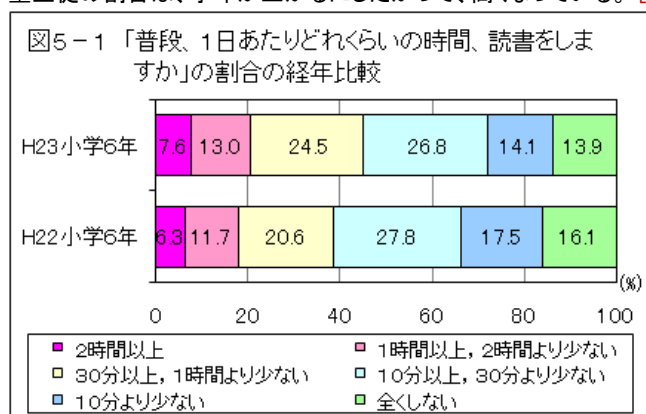


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において、「当てはまる」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高くなっている。読書が好きだと感じている児童生徒ほど、平均正答率が高くなっている。[図3]

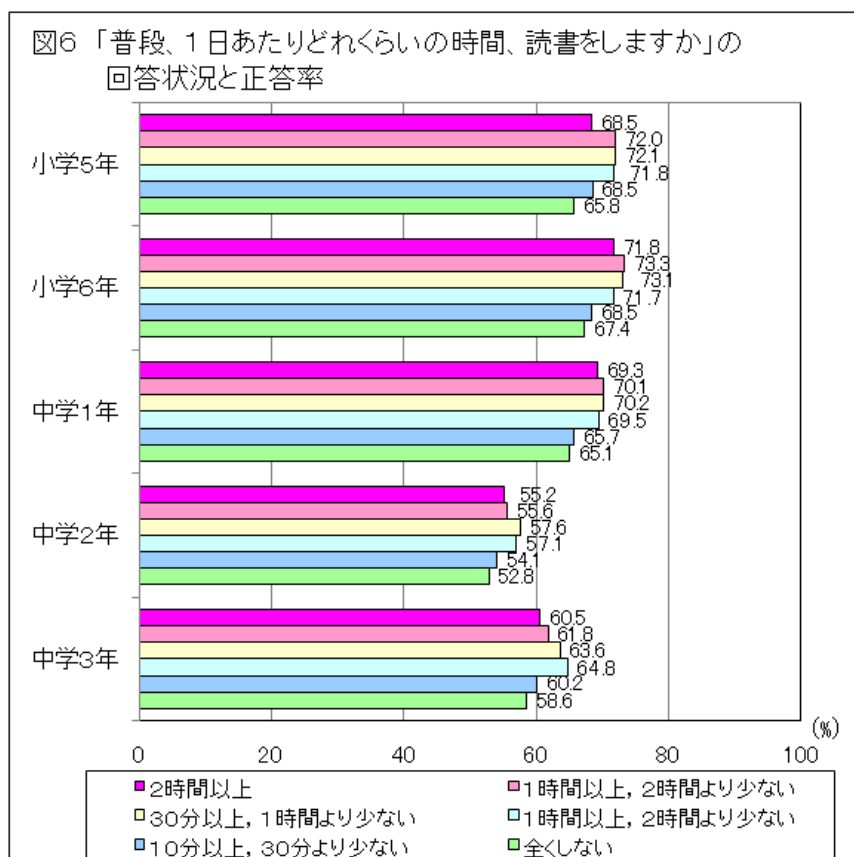
イ「家や図書館で、ふだん(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、読書をしますか(教科書や参考書、漫画や雑誌は除きます。)」について



「10分以上30分より少ない」と回答した児童生徒の割合が小学校5年生から中学校1年生において最も高く、小学5年25.8%、小学6年26.8%、中学1年27.6%となっている。しかし、中学2年と中学3年では、「全くしない」と回答した生徒の割合が最も高く、中学2年26.1%、中学3年27.0%になっている。「2時間以上」「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童生徒の割合の合計は、小学5年24.1%、小学6年20.6%、中学1年17.0%、中学2年16.8%、中学3年17.0%になっている。また、「まったく読まない」と回答した児童生徒の割合は、学年が上がるにしたがって、高くなっている。[図4]

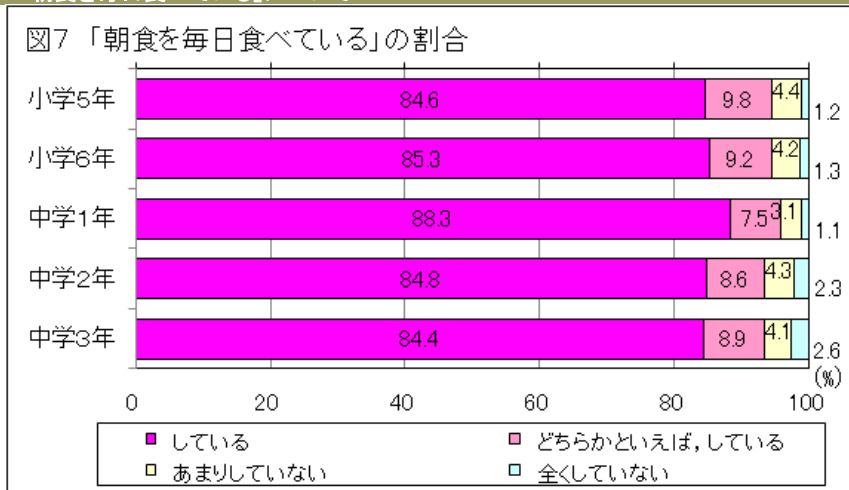


この設問について、小学6年と中学3年を平成22年度と比べると、どちらの学年においても読書をする時間は増えてきていることが伺える。小学校では、30分以上読書する児童の割合が高くなっている。また、中学校では、10分以上読書する生徒の割合が高くなっている。[図5-1、図5-2]

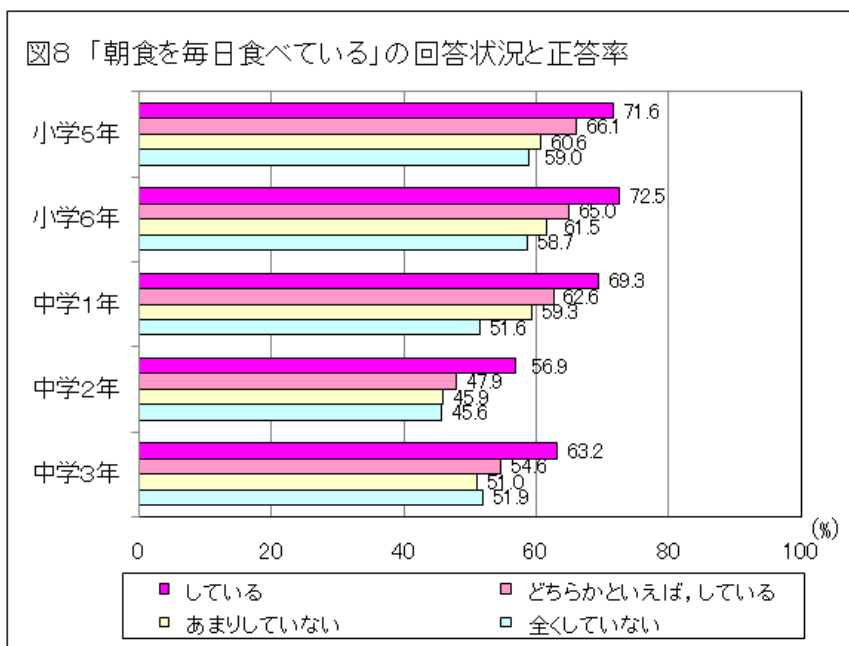


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「まったく読まない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も低い結果となった。また、「2時間以上」と回答した児童生徒を除いては、小学5年から中学1年までは読書する時間が長くなるにしたがって、平均正答率も高くなる傾向が見られた。中学2年と中学3年では、「10分以上、30分より少ない」「30分以上、1時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が高くなってはいるが、全体的には同様の傾向が見られる。[図6]

ウ 「朝食を毎日食べている」について



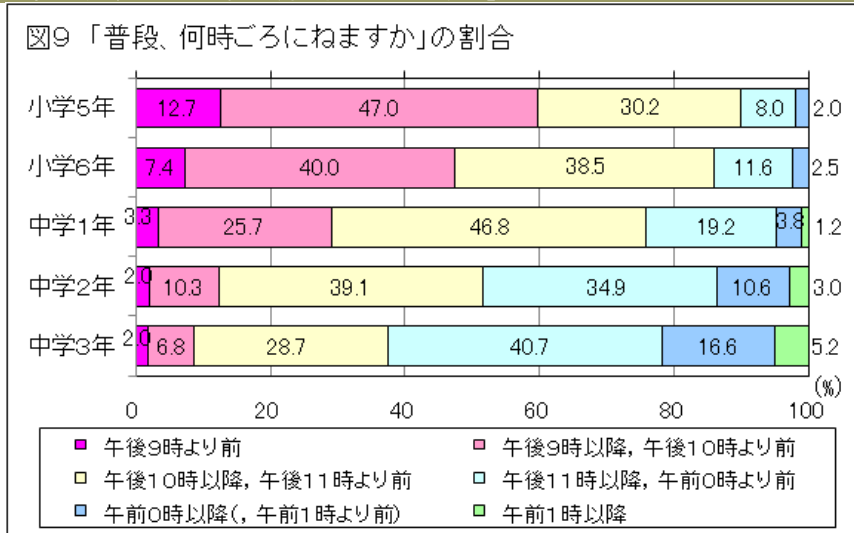
「している」と回答した児童生徒の割合は、小学5年84.6%、小学6年85.3%、中学1年88.3%、中学2年84.8%、中学3年84.4%となっている。「どちらかといえば、している」と回答した児童生徒の割合を合わせると、各学年とも9割を上回っている。[図7]



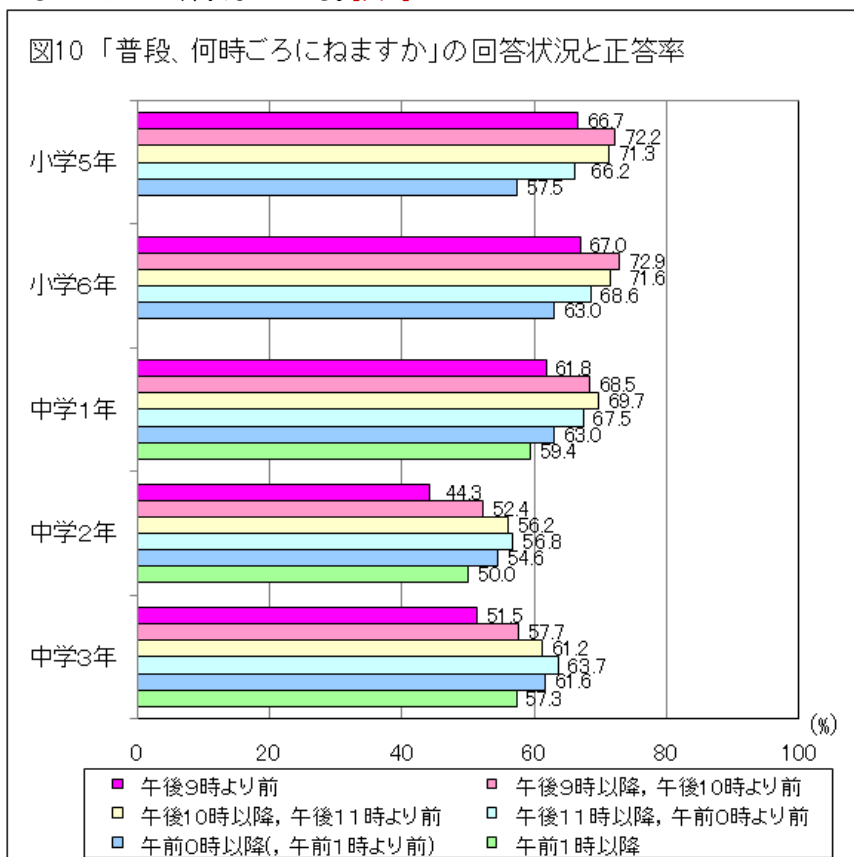
回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「している」と回答した児童の平均正答率が最も高く、朝食を食べている日数が減るにしたがって、平均正答率も低くなっている。

ただし、図7で「全くしていない」又は「あまりしていない」と回答した児童生徒の人数の割合は、いずれの学年においても5%未満と小さいため、比較する際は注意が必要である。[図8]

エ 「普段(月曜日から金曜日)、何時ごろにねますか」について

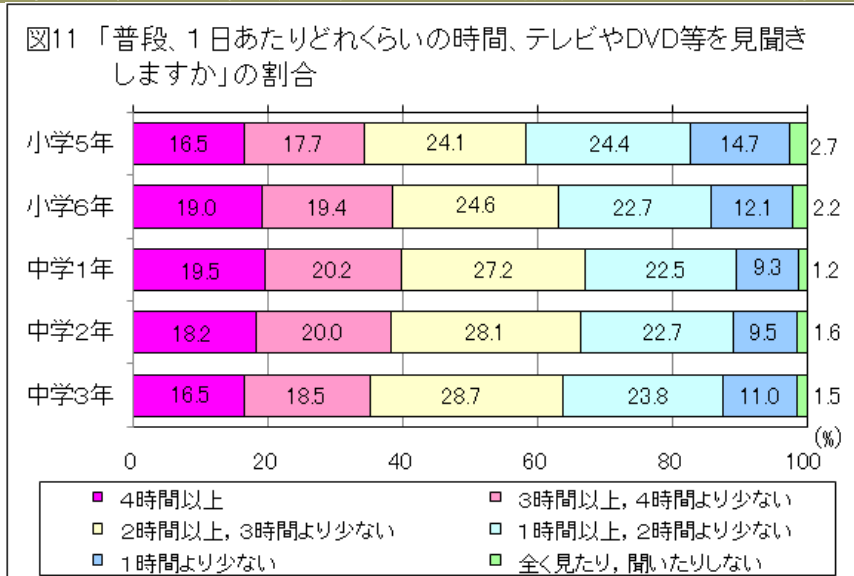


小学校では、「午後9時以降、午後10時より前」と回答した児童の割合が、小学5年47.0%、小学6年40.0%と最も高かった。中学校では、中学1年生では、「午後10時以降、午後11時より前」が最も高く、46.8%、中学2年と中学3年では、「午後11時以降、午前0時より前」が最も高く、2年生で34.9%、3年で40.7%となっている。また、午後11時以降と回答している児童生徒の割合は、学年が上がるにしたがって、高くなっている。[図9]

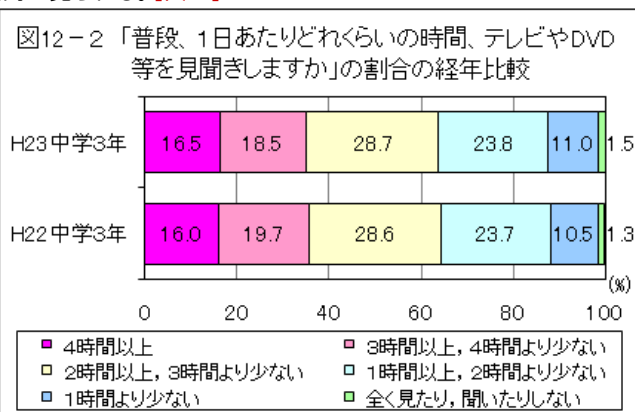
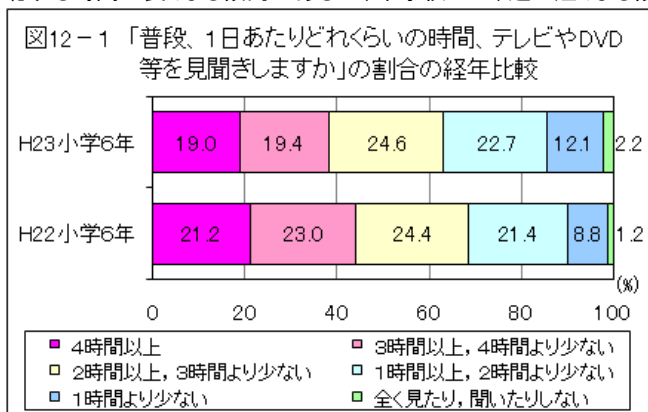


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学年では「午後9時以降、10時より前」、中学1年生では「午後10時から11時までの間」、中学2年生と中学3年生では「午後11時から0時までの間」と回答した生徒の平均正答率が最も高くなっている。また、中学校において「午後9時より前」又は「午前1時より後」と回答した児童生徒の平均正答率は低くなっている。[図10]

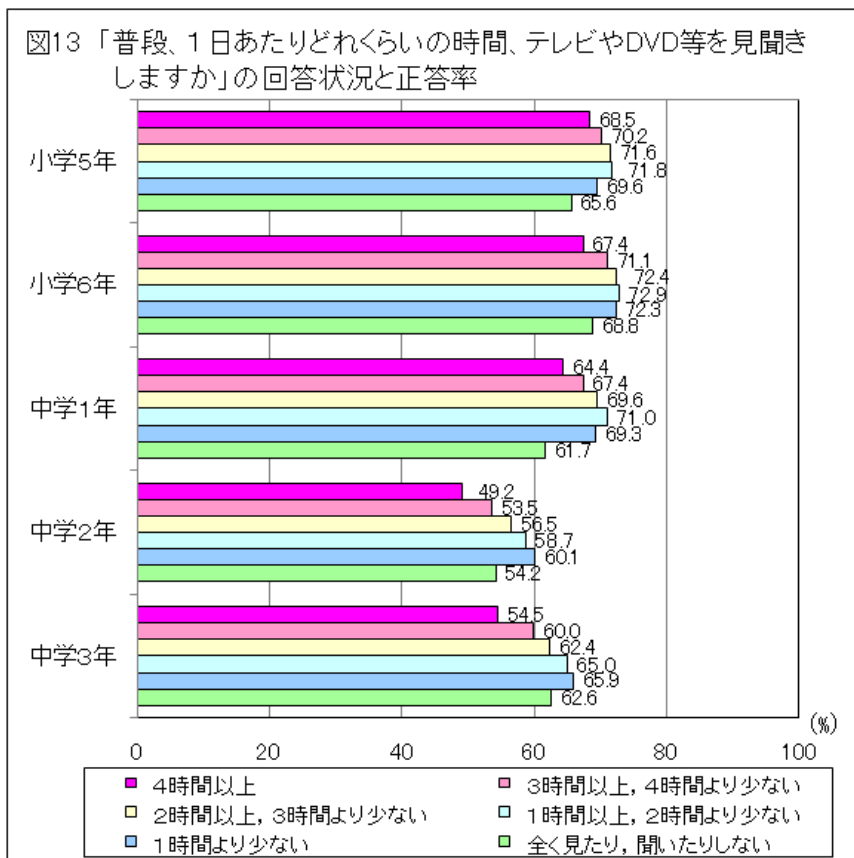
オ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビやビデオ・DVDを見たり、聞いたりしますか」について



小学5年生で「1時間以上、2時間より少ない」が24.4%と最も高く、小学6年生から中学3年生では「2時間以上、3時間より少ない」が最も高く、小学6年24.6%、中学1年27.2%、中学2年28.1%、中学3年28.7%となっている。また、小学校では、学年が上がると視聴する時間が長くなる傾向があるが、中学校では、逆に短くなる傾向が見られる。[図11]

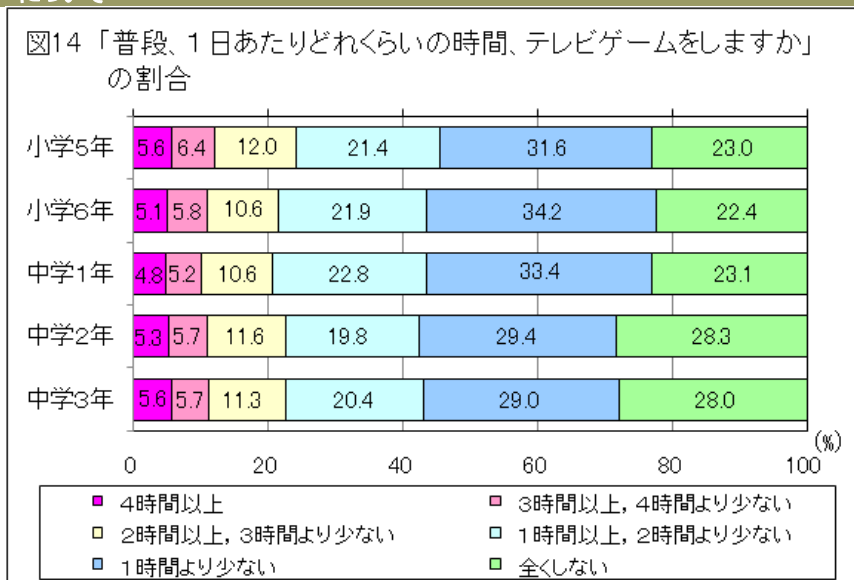


この設問について、小学6年と中学3年を平成22年度と比べると、小学6年生では、テレビやDVD等を視聴する時間は、減少の傾向がうかがえる。中学3年生でも、4時間以上の割合は高くなったものの、全体的な傾向としては、わずかではあるが減少傾向にある。[図12-1、図12-2]

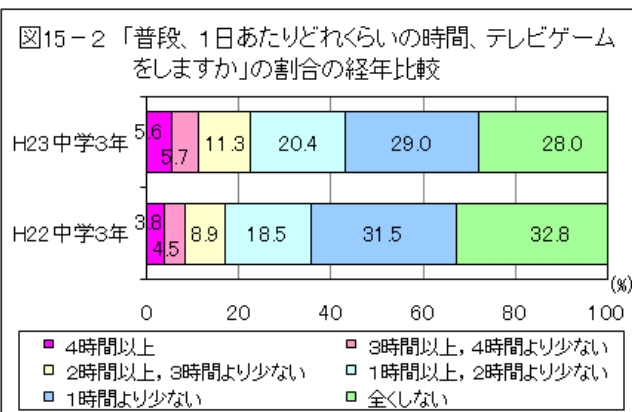
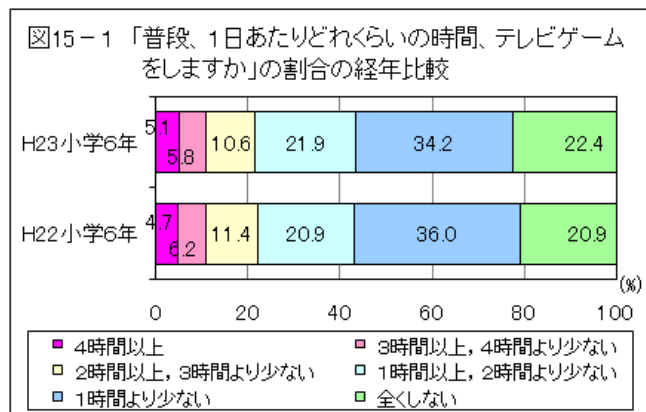


回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、小学校では、「1時間以上、2時間より少ない」と回答した児童の平均正答率が高くなる傾向が見られる。中学校では、「1時間より少ない」または「1時間以上、2時間より少ない」と回答した生徒の平均正答率が高くなる傾向が見られる。また、全ての学年において、「4時間以上」「全く見たり、聞いたりしていない」と回答した児童生徒の平均正答率が低くなる傾向が見られた。【図13】

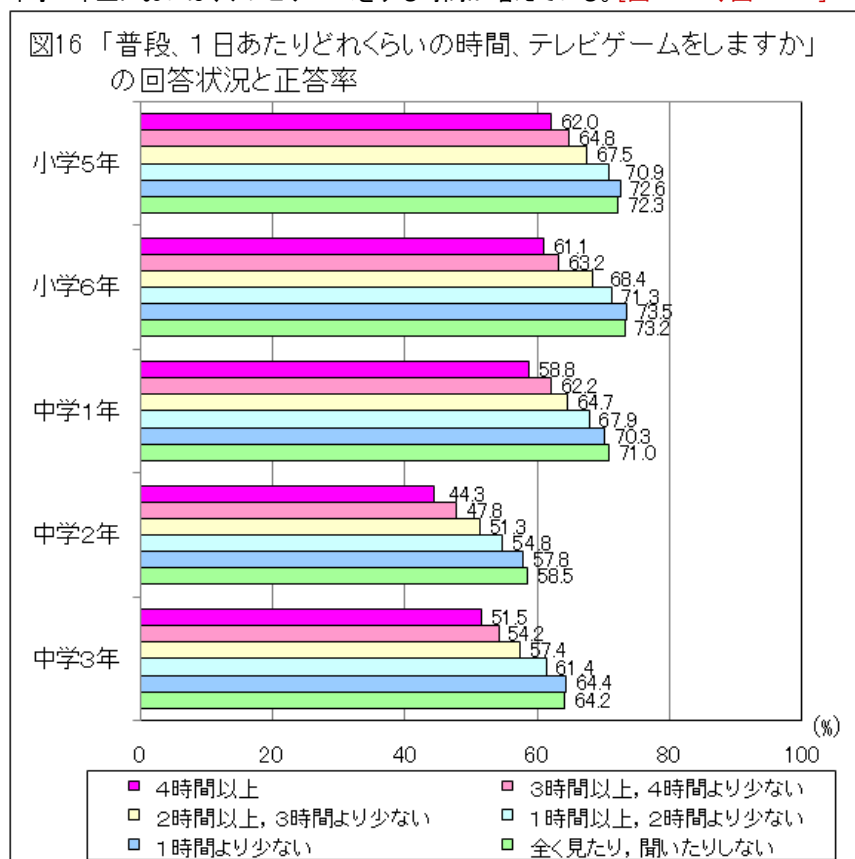
カ 「普段(月曜日から金曜日)、1日あたりどれくらいの時間、テレビゲーム(コンピュータゲーム、携帯式のゲームをふくみます。)をしますか」について



どの学年においても「1時間より少ない」と回答している児童生徒の割合が最も高く、小学5年31.6%、小学6年34.2%、中学1年33.4%、中学2年29.4%、中学3年29.0%となっている。また、小学校では、学年が上がるとテレビゲームをする時間が減少する傾向が見られるが、中学校では、逆に学年が上がるとテレビゲームをする時間が増加する傾向が見られる。【図14】



この設問について、小学6年生と中学3年生徒で前年度調査と比較すると、小学6年生では、大きな変化が見られなかった。しかし、中学3年生においては、テレビゲームをする時間が増えている。[図15-1、図15-2]



回答状況と全教科平均正答率との関連を見ると、全ての学年において「全くしない」または「1時間より少ない」と回答した児童生徒の平均正答率が最も高く、ゲームをする時間が増えるにしたがって、平均正答率も低くなっている。[図16]

○ 今後の指導に向けて

読書については、読書が好きだと感じている児童生徒が増加していることや、少しずつ読書をする時間が増加していることから、読書習慣が少しずつ定着していることがうかがえる。読書をする時間と全教科平均正答率との関連を見てみると、どの学年も、30分より少ない児童生徒の平均正答率が低くなっている。このことから、読書をすることは学力の向上にもよい影響を与えていることが考えられる。今後もより一層の読書の定着を図る上において、朝の10分間読書や読書週間の設定、家庭との連携による家庭での読書習慣の確立、学校図書館等の環境整備など、取組の工夫改善が望まれる。

朝食については、朝食を毎日食べることが学習面と関係があることが全教科平均正答率との関連グラフからうかがえる。朝食を毎日食べることは、生活のリズムを整えることにもつながり、そのことが学習面にもよい影響を与えていると考えられる。各学校においては、食育と関連付けながら指導してだけでなく、家庭にも毎日朝食を食べることの大切さについての啓発を行いながら、家庭と連携し指導に当たっていくことが望まれる。

就寝時間については、家庭学習の時間や読書時間のことを考えると、早ければよいというわけではない。しかし、極めて遅い就寝時刻は、学習面において悪影響を及ぼしている可能性があると考えられる。各学年の状況に応じて、帰宅してから就寝までの時間の有効な使い方について、家庭との連携を図りながら指導していくことが望まれる。

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ

1 教科全般における指導法の工夫

- 発展的な課題については、児童生徒の実態や学習の内容に応じて適宜取り入れていくことで効果が上がると考えられる。
- 表現する活動については、「書いて表現する活動」と「発表や話し合いなどの表現活動」との調和を図り、両者の関連を図った指導を工夫することで効果が上がると考えられる。
- 単元の学習目標や評価規準を明確にした上で、その目標を達成するために必要な教材や指導計画に取り入れて指導を行っている教師の割合は高い。

この節では、

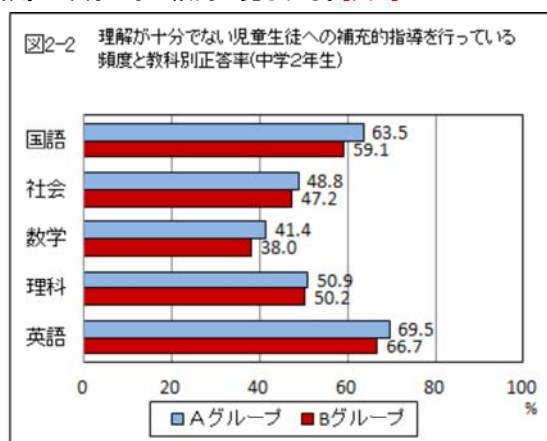
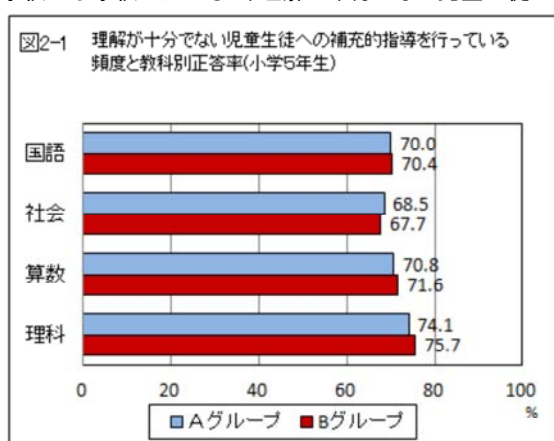
- ・理解が十分でない児童生徒への補充状況
- ・表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業
- ・身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間の指導
- ・学習形態を工夫したメリハリのある授業
- ・PDCAサイクルを踏まえた実践

の設問から、補充的指導、表現力の育成、総合的な学習の時間の指導、学習形態の工夫などの状況について分析する。

ア「理解が十分でない児童生徒に対し、授業の合間や放課後などに更に指導していますか」について

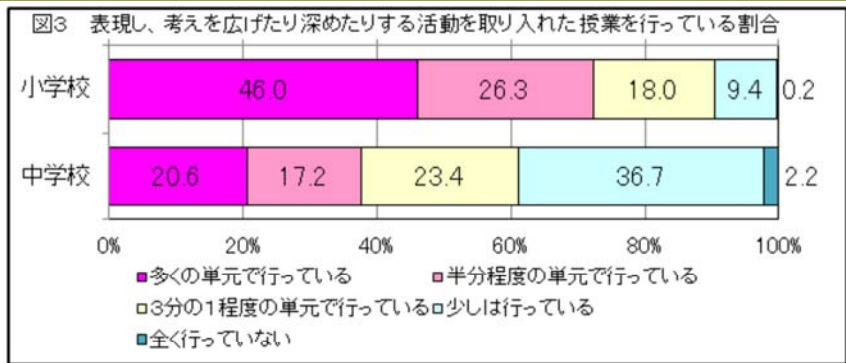


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は60.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は27.3%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は54.2%と過半数を超えている。中学校は小学校に比べると、理解が十分でない児童生徒に対しての指導が十分でない傾向が見られる。[図1]

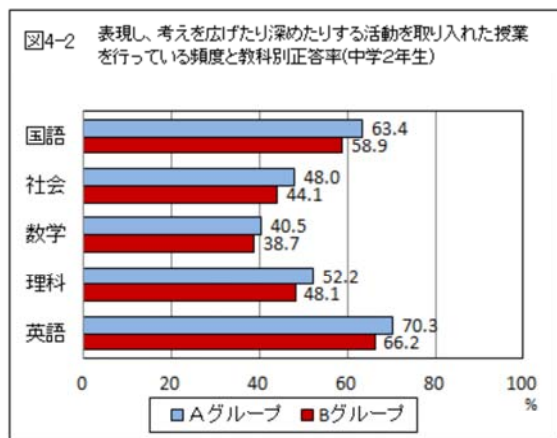
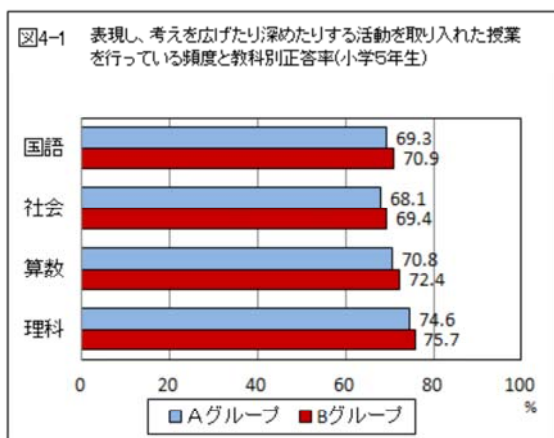


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、理解が十分でない児童生徒に対して、細やかな指導を行ってきたことの効果の表れと考えることができる。[図2-1][図2-2]

イ「発表や話し合い活動などを表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業を行っていますか」について

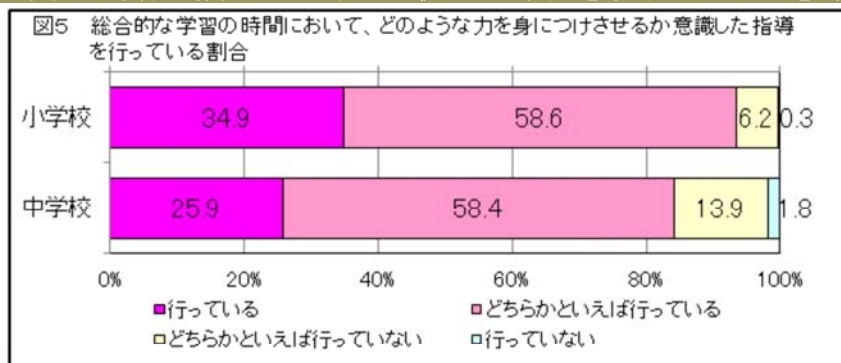


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は72.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は37.8%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は38.9%となっている。中学校は小学校に比べると、発表や話し合い活動など、表現し、考えを広げたり深めたりする活動を取り入れた授業への意識が低い傾向が見られる。[図3]

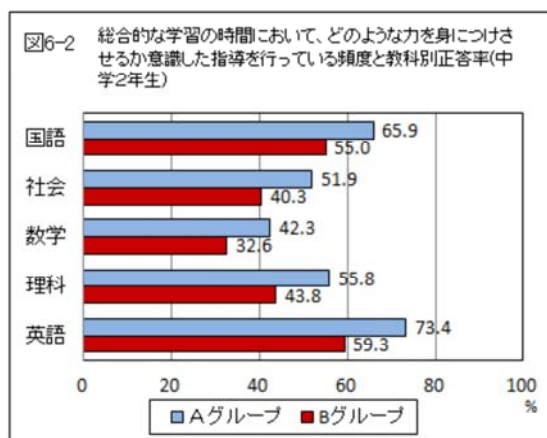
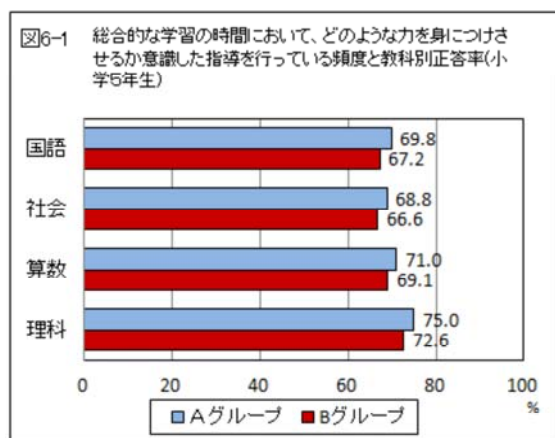


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、自分の考えを表現させることで、考えたことを整理させたり共有化を図らせたりしてきた効果の表れと考えることができる。[図4-1][図4-2]

ウ 「総合的な学習の時間においては、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識した指導を行っていますか」について

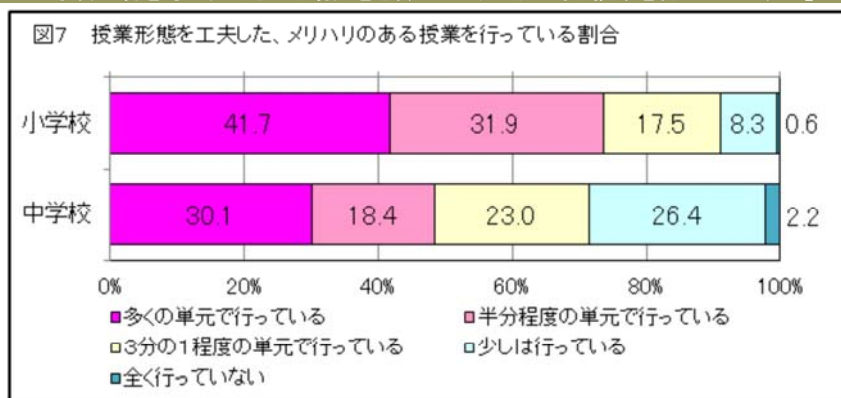


「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答をした小学校教師の割合は93.5%である。同じ回答をした中学校教師の割合は84.3%である。小学校と中学校ともにほとんどの教師が、総合的な学習の時間においては、児童生徒にどのような力を身に付けさせるのかを意識して指導を行っていることが分かる。【図5】

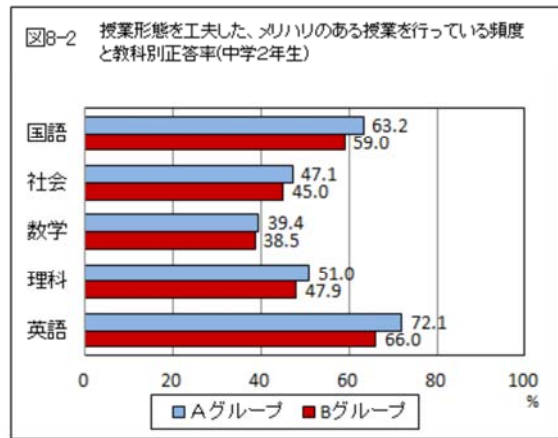
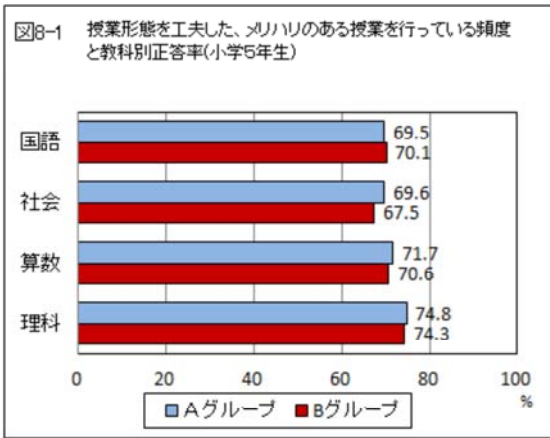


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。中学校でも全ての教科においてAグループの平均正答率が高く、どの教科も10ポイントほど上回っている。【図6-1】【図6-2】

エ 「教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面とグループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業を行っていますか」について

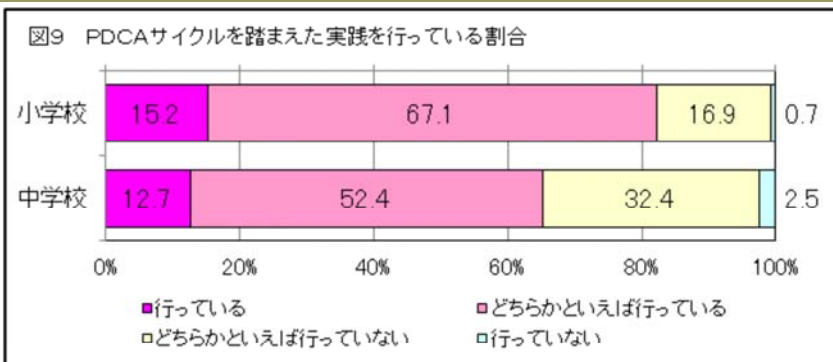


「多くの単元で行っている」「半分程度の単元で行っている」と回答をした小学校教師の割合は73.6%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は48.5%であり、逆に「少しは行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は28.6%となっている。中学校は小学校に比べると、教師による指導を通して確実に学習内容を身に付けさせる場面と、グループ活動やペア活動の形態を取り入れ、生徒の学び合い活動を通して学習内容を身に付けさせる場面を意識したメリハリのある授業への意識が低い傾向が見られる。【図7】

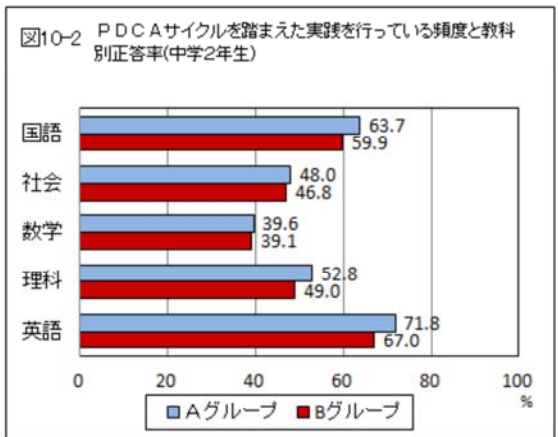
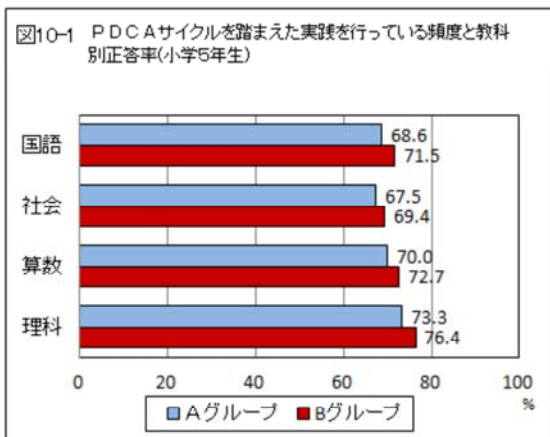


この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において同程度、または、Aグループの平均正答率が高くなっている。中学校でも全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、英語において顕著に表れている。[図8-1][図8-2]

オ「日常の授業や単元等の指導、学校における教育活動において、PDCAサイクル(計画→実施→評価→改善)を踏まえた実践を行っていますか」について



「行っている」「どちらかといえば行っている」と回答をした小学校教師の割合は82.3%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は65.1%である。中学校は小学校に比べると、PDCAサイクルを踏まえた実践への意識が低い傾向が見られる。[図9]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では全ての教科において明らかな特徴は見られないが、中学校では、全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。これは、計画的な実践と、取り組んだ結果からの改善を図ってきた効果の表れであると考えられる。[図10-1][図10-2]

○ これからの指導に向けて

学習活動の形態を工夫した授業

授業の中において、ペアでの活動やグループでの活動を設定し、児童生徒に自分の考えを伝える機会を与えることは、児童生徒一人一人に発言機会を保證することになるだけでなく、他者に伝えるために自分の考えを整理したり、他者と比べることで、考え方が広がりたりする効果が期待でき、また、児童生徒の言語能力や表現力を高めていくことにもつながっていく。ただ、一方でその基盤となる基礎的・基本的な知識・技能の定着が低下するといった悪影響も考えられる。そのため、知識や技能を習得させる際に教師主導による学習活動の形態をとったり、知識や技能を活用させる際にお互いの考えを伝え合う学習活動の形態をとったりするなど、授業の目的や学習内容に応じて、より効果を上げるための教師側の授業の進め方の工夫が求められる。

身に付けさせたい力を意識した総合的な学習の時間における指導

今回の調査結果から、総合的な学習の時間において、身に付けさせたい力を意識した指導を行うことによって、児童生徒の教科における学力の向上にも、よい影響を与えていることを確認することができた。学習指導要領において、総合的な学習の時間については、各教科等を横断する課題について問題解決や探究的な活動を行うことにより、児童生徒の思考力・判断力・表現力を育むとともに、各教科における基礎的・基本的な知識・技能の習得にも資するなど教科と一体となった指導が求められている。今後も、総合的な学習の時間については、これらのことを各学校や各教師が意図しつつ、指導計画や学習内容を考えながら取組の充実を図っていくことが大切である。中央教育審議会の答申(平成20年1月17日)[※1]においても、総合的な学習の時間の学校間、学校段階間の取組の実態に差があることを課題としており、学校としてのカリキュラムマネジメント能力の向上が求められている。学習指導要領の改訂に伴い、総合的な学習の時間の縮減はあるもののその重要性については、更に強調されることとなる。各学校におけるカリキュラムマネジメント能力の向上が大いに期待されるところである。

※1 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校学習指導要領の改善について」(答申)
平成20年1月17日 ⑩総合的な学習の時間(130ページ～132ページ)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ>IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の全てのグラフ

2 学習環境の活用

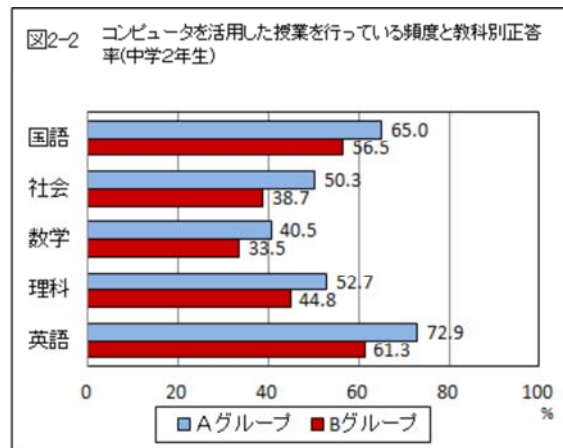
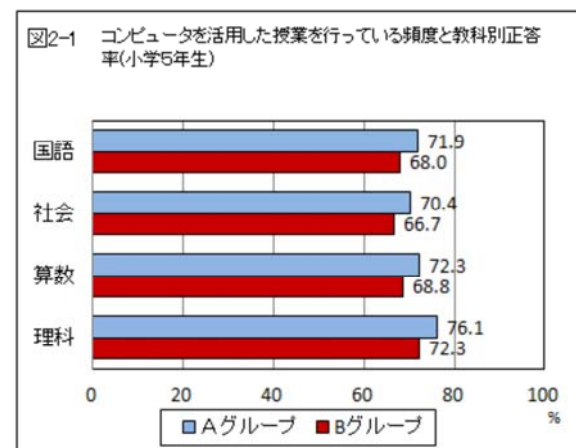
- 授業におけるコンピュータと学校図書館の活用頻度や活用内容には、小中学校の違いが見られる。[図1][図3]
- 小学校と中学校ともに、コンピュータを活用した授業を行っている学校ほど、正答率が高くなる傾向が見られる。今後も各授業におけるコンピュータの有効な活用方法について探り、積極的に取り組んでいくことが望まれる。[図2-1][図2-2]

この節では、授業におけるコンピュータや学校図書館の活用頻度と教科別正答率との関連及びそれぞれの活用内容について分析する。

ア 「コンピュータを活用した授業を行っていますか」について

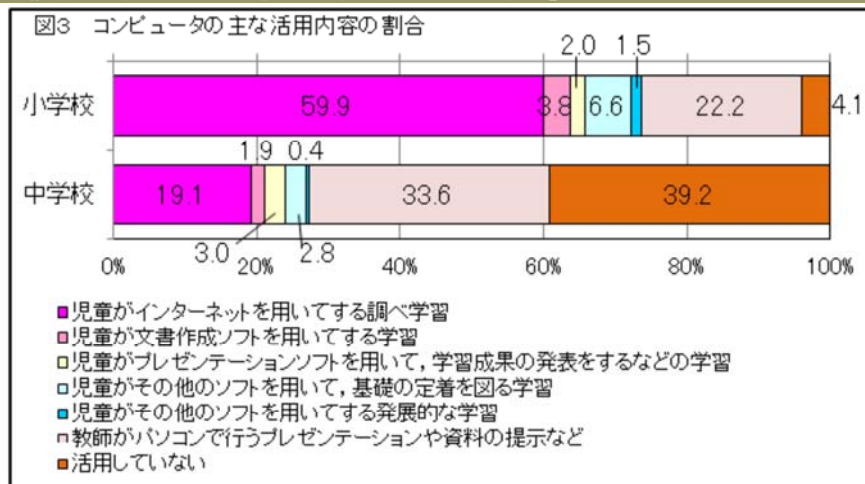


「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答をした小学校教師の割合は58.0%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は10.7%であり、逆に「年に1～2回程度行っている」「全く行っていない」と回答をした割合は70.6%と高くなっている。中学校は小学校に比べると、コンピュータを活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図1]



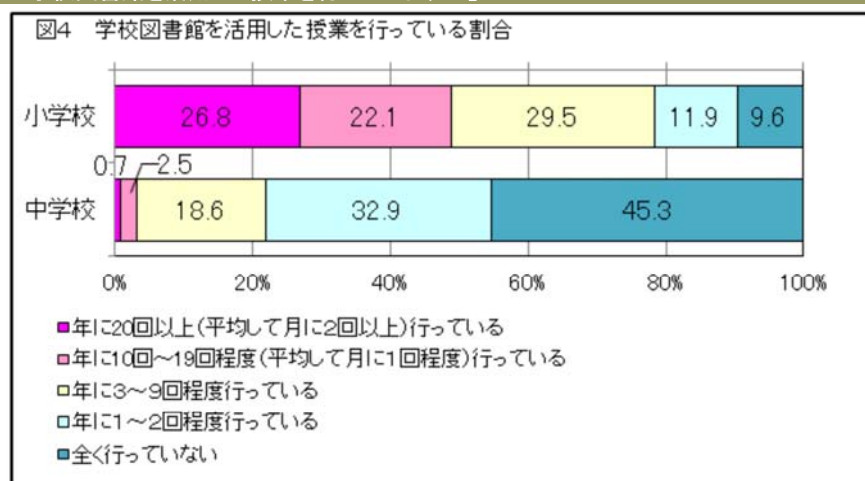
この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校の全ての教科で顕著に表れており、社会と英語においては10ポイント以上、上回っている。[図2-1][図2-2]

イ 「授業では、コンピュータをどのように活用していますか」について

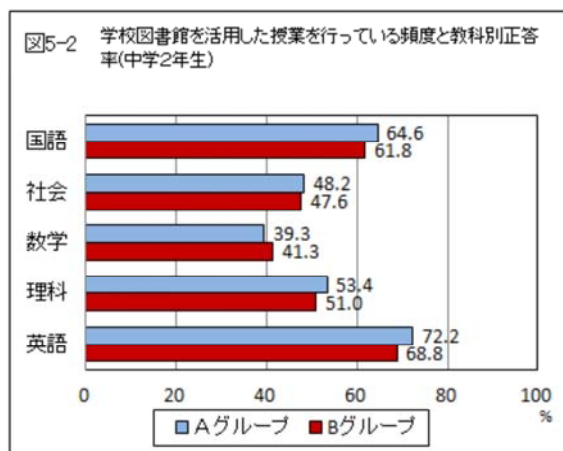
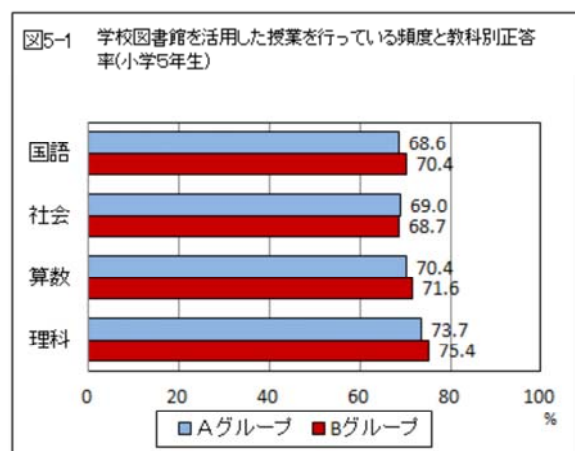


小学校ではコンピュータを活用していると回答をした教師の中において、「児童がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が59.9%と、最も高くなっている。これに対し、中学校では「教師がパソコンで行うプレゼンテーションや資料の提示など」と回答をした教師の割合が33.6%と最も高く、次いで「生徒がインターネットを用いてする調べ学習」と回答をした教師の割合が19.1%となっている。[図3]

ウ 「学校図書館を活用した授業を行っていますか」について

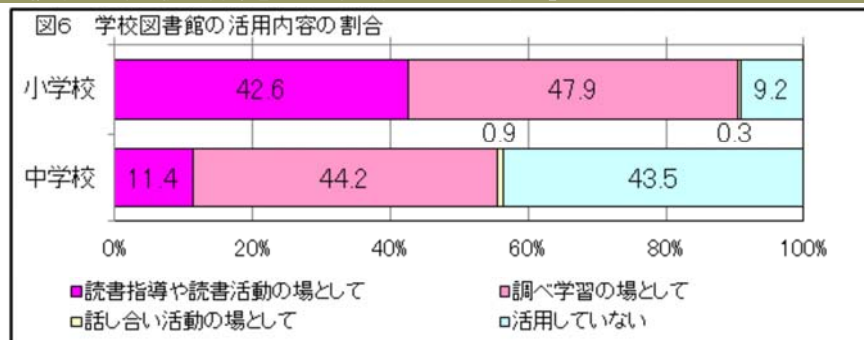


「年に20回以上(平均して月に2回以上)行っている」「年に10回から19回程度(平均して月1回程度)行っている」と回答した小学校教師の割合は48.9%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は3.2%であり、逆に「年に1~2回程度行っている」「全く行っていない」と回答をした割合が78.2%と高くなっている。中学校は小学校に比べると、図書館を活用した授業があまり行われていない傾向が見られる。[図4]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では、特におおきな傾向は見られないが、中学校では、全体的にAグループの平均正答率が高くなる傾向が見られる。[図5-1][図5-2]

エ 「授業では、学校図書館をどのように活用していますか」について



図書館を活用していると回答をした教師の中において、小学校と中学校ともに「調べ学習の場として」と回答をした教師の割合がそれぞれ47.9%、44.2%と最も高くなっている。次いで、小学校と中学校ともに「読書指導や読書活動の場として」と回答をした教師の割合がそれぞれ42.6%、11.4%となっている。[図6]

○ これからの指導に向けて

コンピュータを活用した授業

平成23年度佐賀県教育の基本方針において、ICT利活用教育の推進が掲げられている。今日の社会の情報化が急速に進展していることを考えれば、児童生徒だけでなく教師の情報活用能力を向上させることは、今後の教育課題の1つであると考えられる。また、今回の調査結果から、ICTを授業へ活用することは、学力の向上に効果が期待できると考えられる。ICTを授業に活用することは、教師の指示を明確にしたり、見せながら話すことで説明が分かりやすくなったり、課題や図を簡単な操作で分かりやすく表せたりすることなど、様々なよさがあると考えられる。佐賀県内の各学校においても、少しずつ電子黒板やコンピュータなどの環境の充実が図られ、公開授業や研究会などが行われている。今後も、教師のICT活用におけるスキルアップ研修や児童生徒への情報モラルに関わる教育なども計画的に行いながら、積極的な活用を推進していくことが必要である。また、学校図書館についても、児童生徒の実態や学習の内容に応じて、学力向上における効果的な方法を探りながら活用していくことが大切である。

最終更新日:2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

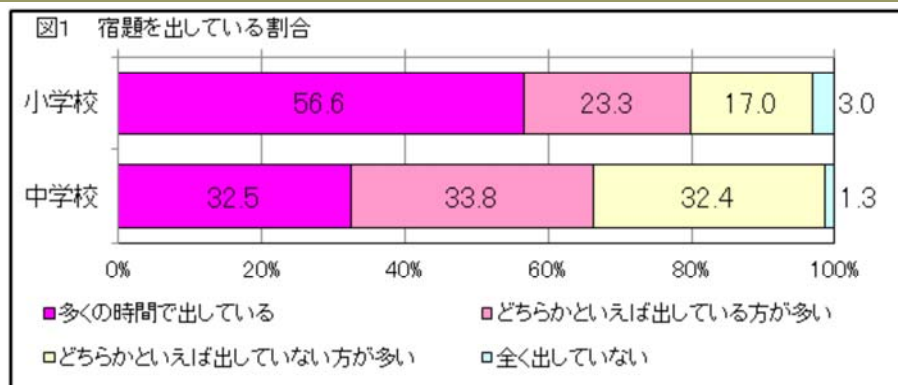
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

3 家庭学習への関与状況

- 宿題については、小学校と中学校とも主に復習的な内容が出されている割合が高いが、予習的な内容を出すことについても、学力向上に効果があると考えられる[図3][図4][図5-1][図5-2]。児童生徒へ与える宿題の内容や出し方についても、学力向上に向けより有効となるように検討していく必要がある。

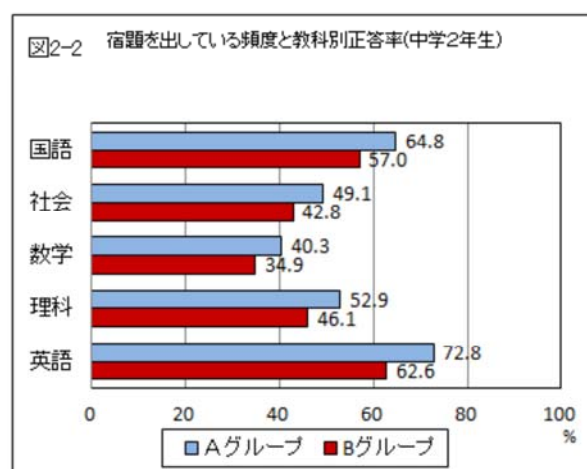
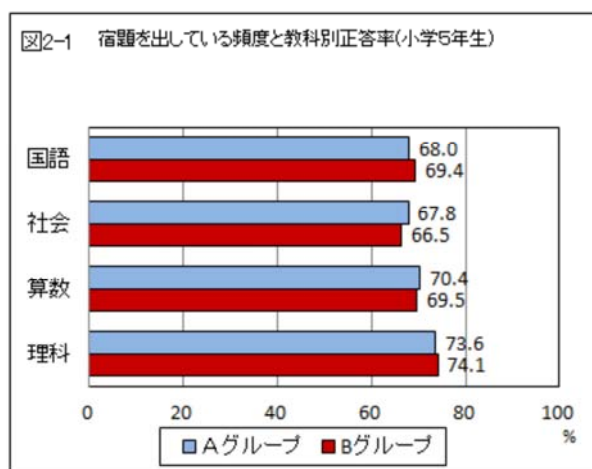
この節では、宿題を出している頻度及び出している宿題の内容(予習的宿題・復習的宿題)について問うことにより、宿題の出題状況を分析する。

ア 「宿題を出していますか」について



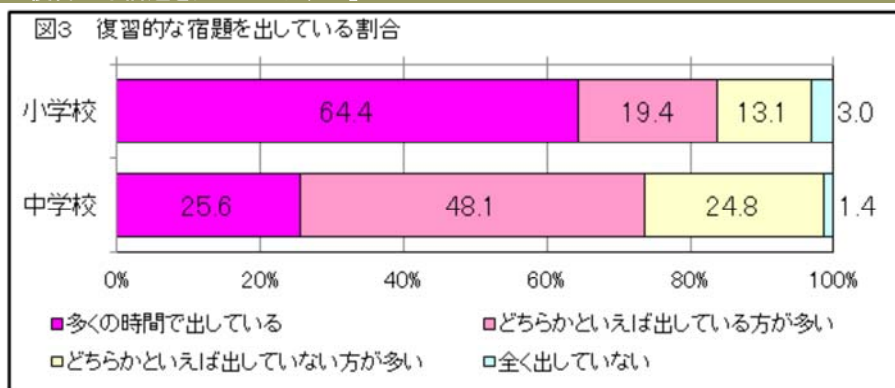
「多くの時間を出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合は79.9%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は66.3%である。小学校教師の方が中学校教師よりも宿題を出している傾向が見られる。

[図1]



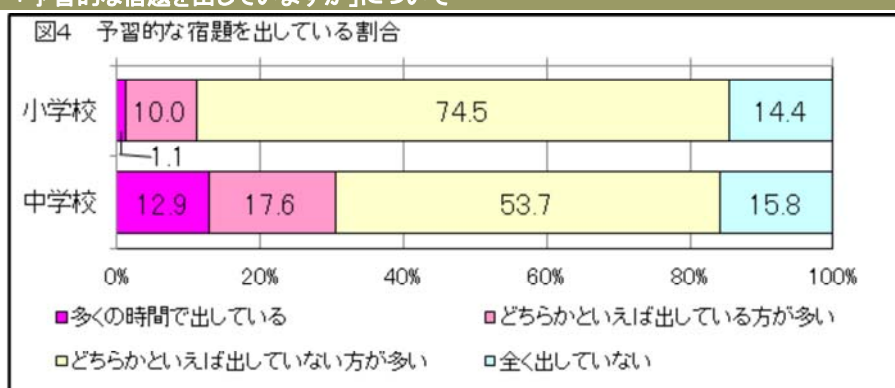
この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校では明らかな特徴は見られないものの、中学校では全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっており、顕著に表れている。特に英語においては、10.2ポイント上回っている。[図2-1][図2-2]

イ 「復習的な宿題を出していますか」について

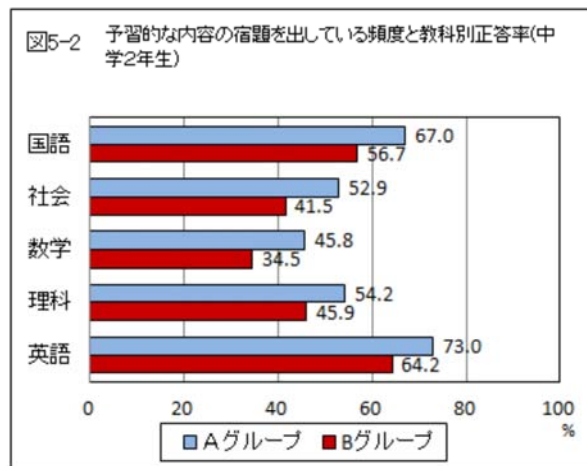
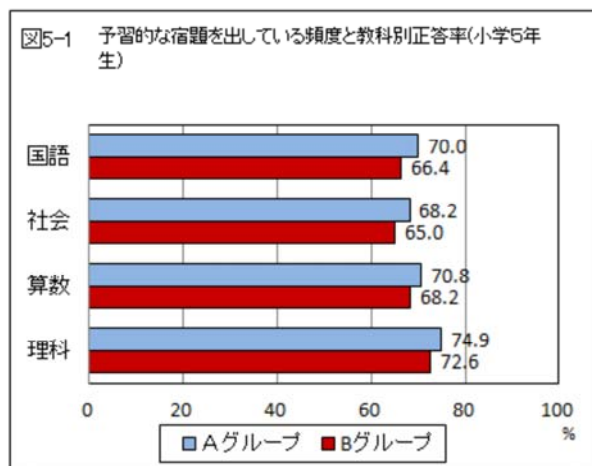


「多くの時間で出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答をした小学校教師の割合は83.8%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は小学校に比べるとやや低いが、73.7%である。図4のグラフとの比較より、小学校と中学校ともに復習的な宿題を出している教師の割合が高い傾向が見られる。[図3]

ウ 「予習的な宿題を出していますか」について



「多くの時間で出している」「どちらかといえば出している方が多い」と回答した小学校教師の割合は11.1%である。これに対し、同じ回答をした中学校教師の割合は30.5%であり、小学校よりも高い結果となっている。[図4]



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校とも全ての教科においてAグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校では全ての教科において顕著に表れており、10ポイント程度上回っている。[図5-1][図5-2]

○ これからの指導に向けて

復習的な宿題と予習的な宿題

小学校、中学校共に、多くの教師が宿題を出しており、その多くは復習的な内容の宿題である。宿題の主な目的については、家庭学習の習慣化や授業における学習事項の定着とされている。そのため小学校教師は、その目的に対する意識は強い傾向がある。その一方で、中学校教師は、小学校教師に比べると予習的な内容の宿題についても出している傾向が見られる。予習的な宿題に取り組ませることは、事前に学習内容に対する自分なりの考えをもたせることになり、授業における児童生徒の主体的な学習活動を促し、自己学習力の育成へとつながっていくものとする。さらに、意図的に予習的な宿題を出すことと授業における児童生徒の主体的な学習活動とを結び付けることが、児童生徒の興味・関心を高めることにもつながり、学習意欲を喚起するための手立ての一つとして有効であるとする。また、復習的な宿題においては、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図ることを目的とする内容だけでなく、授業で身に付けた知識・技能を活用して課題を解決させるような視点での内容についても検討していくことが望まれる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

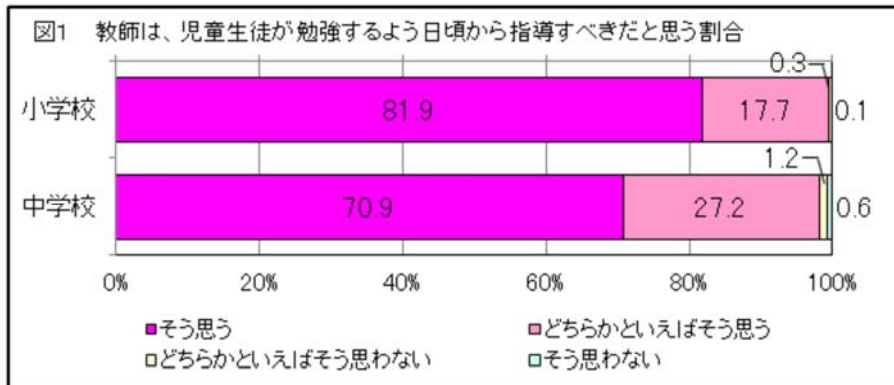
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

4 教師の指導観

- 小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒ができるだけ勉強するように、日頃から指導すべきだと思っている。[図1]
- 小学校と中学校のほとんどの教師が、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思っている。[図2]
- 小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思っている。また、日頃から細かく指導していくことは、学力の向上につながるものと考えられる。[図3][図4-1][図4-2]

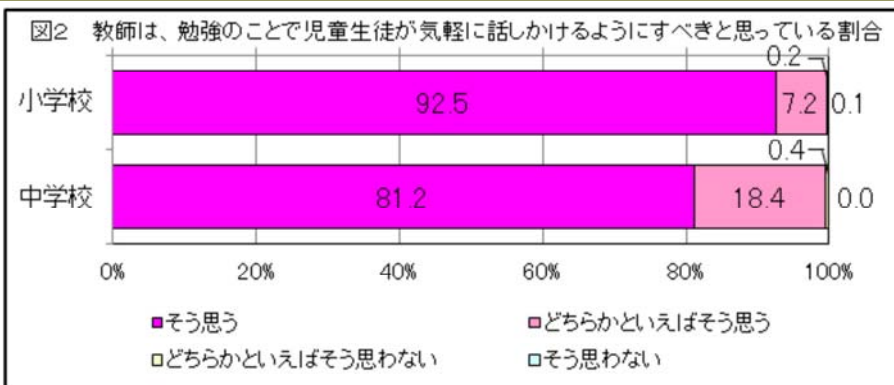
この節では、教師の児童生徒に対する学習指導や生活指導に関わる意識についての質問から、教師の指導観及び学力向上との関連について分析する。

ア 「教師は、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきだと思いますか」について



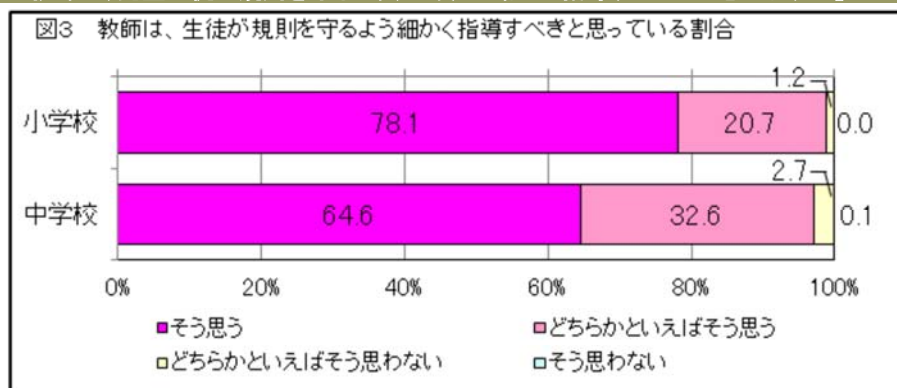
「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は99.6%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.1%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒ができるだけ勉強するよう、日頃から指導すべきであると思っていることが分かる。[図1]

イ 「教師は、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思いますか」について

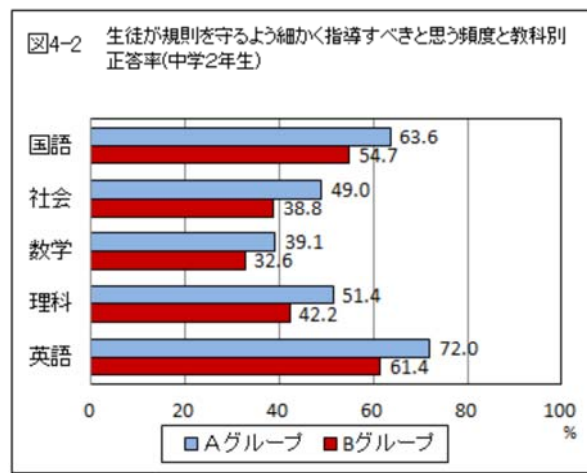
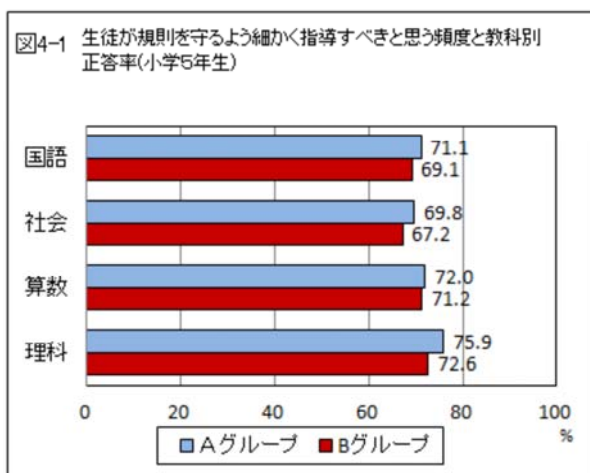


「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は99.7%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は99.6%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、勉強のことで児童生徒がいつでも気軽に話し掛けられるようにすべきだと思っていることが分かる。[図2]

ウ 「教師は、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思いますか」について



「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は98.8%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は97.2%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、児童生徒が規則を守るよう、日頃から細かく指導すべきだと思っていることが分かる。【図3】



この設問においてAグループとBグループの教科別平均正答率を比較すると、小学校と中学校ともに全ての教科において、Aグループの平均正答率が高くなっている。特に、中学校の全ての教科で顕著に表れており、社会と英語において10ポイント以上、上回っている。【図4-1】【図4-2】

○ これからの指導に向けて

学習指導や生活指導に対する意識のもち方について

児童生徒の学力の向上を図る上においては、教師側も目標や向上心をもって、日頃から児童生徒の指導や支援に当たることが、必要不可欠である。日頃の指導や支援の在り方については、児童生徒の状況により常に同様にはいかない場面も多々あると思われる。しかしながら、常に教師側が高い意識をもち、児童生徒の将来を見据えながら学習面や生活面における向上を目指し、指導や支援に当たっていくことが大切である。今回の調査結果からは、ほとんどの教師が日頃から学習指導や生活指導に対し、共通した高い意識をもちながら、指導に当たられていることが分かる。また、【図4】の調査結果から、児童生徒の学校生活に対し、日頃から細かく指導していくことが、学力の向上によい影響を与えていることが分かる。

最終更新日： 2011-10-07

平成23年度佐賀県小・中学校学習状況調査Web報告書

Web報告書もくじ> IV 教師意識調査の結果の分析

教師意識調査の結果の分析

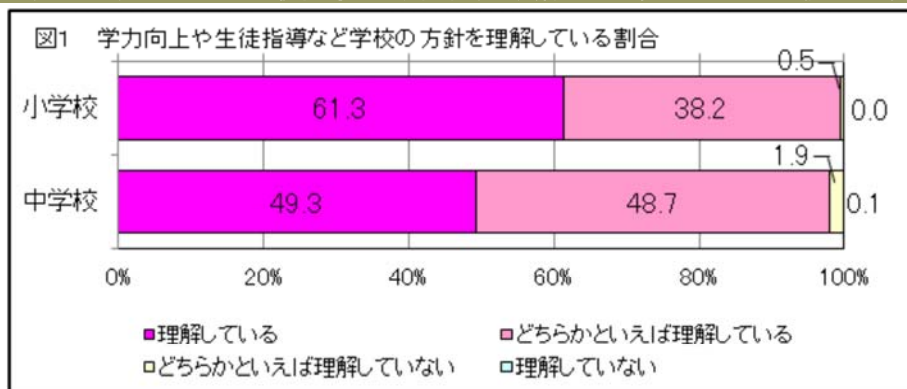
[教師意識調査の全てのグラフ](#)

5 学校組織のマネジメントに対する意識

- 教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していると回答した教師は9割を大きく上回っている。[図1]
- 教育活動の具体的な内容についての共通理解が図られていると回答した教師は9割を大きく上回っている。[図2]

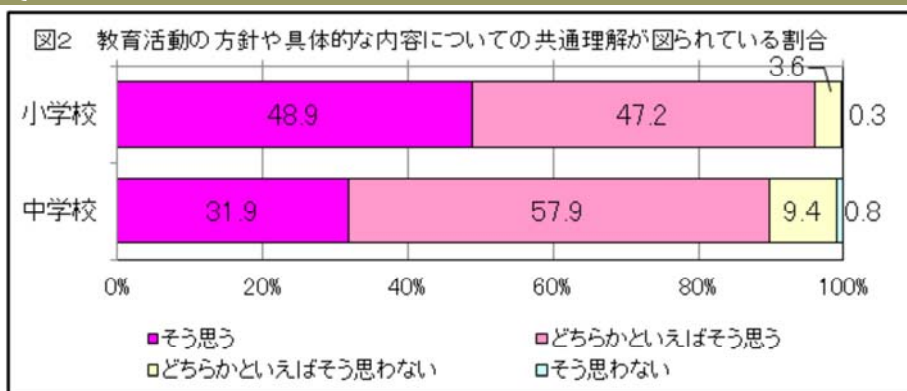
この節では、教育活動方針の理解、方針や内容についての共通理解について問うことにより、教師の学校組織のマネジメントに対する意識を把握する。

ア 「あなたは、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していますか」について



「理解している」「どちらかといえば理解している」と回答をした小学校教師の割合は99.5%であり、同じ回答をした中学校教師の割合は98.0%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、学力向上や生徒指導など教育活動の具体的な内容についての学校の方針を理解していることが分かる。[図1]

イ 「あなたの学校では、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思いますか」について



「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答をした小学校教師の割合は96.1%である。同じ回答をした中学校教師の割合は小学校に比べるとやや低いが、89.8%である。小学校と中学校のほとんどの教師が、教育活動の方針や具体的な内容について、学校全体で共通理解が図られていると思っていることが分かる。[図2]

○ これからの指導に向けて

学校組織マネジメントに対する意識との関連

指導法の改善、充実を図るためには、学校全体で取り組むという各教師の意識を高めていくことが大切であり、学校組織マネジメントの充実は不可欠である。今回の調査結果を、県全体として学校組織マネジメントの視点から見た場合、おおむね良好であるといえる。これは、教師集団が目的を共有化しており、教師間の連携・協働体制が有効に働き、学校全体で教育に取り組む風土が醸成されていることの表れであると考えられる。

最終更新日： 2011-10-07